ハンドボール「第60号目次」

昭和43年12月号

表紙写真　第21回学生王座決定戦で最後の王座を獲得した立教チーム（12.1大阪中央体育館）

ニコンF　50㎜ 2
5.6/125　Tri X
（ASA1000に増感）

本誌61号の発行は2月1日です

時評

ミユンヘンには審判員も

▽……火と光が乱舞する夜空に浮き出た「ムニッヒ（ミユンヘン）72」の電光文字—メキシコ・オリンピックのフイナーレを飾るこの光景を世界の人々はさまざまな感がいで見ていたことだろう。

とりわけ、ハンドボール関係者の胸中は、期待と希望に満ちたものであったにちがいない。

一九三六年のベルリン大会以来36年ぶりに聖火の下でハンドボールが行われるというニュースほど世界のハンドボール界を明かるくさせたものはないのだ。

どこの国も、そして誰もが、その立ち場々々で来るべき一九七二年への抱負を新たにしたことだろう。

▽……日本協会も懸案の選手強化対策本部が発足し活発な動きを示しはじめた。頻冲しいことである。

ところでミユンヘン大会をめざすのは、なにもコーチであり選手ばかりであるとは限らない。

あらゆるハンドボール関係者はこの36年ぶりに訪れた好機に、これまでの研さんの成果を示そうと意欲を燃やしているのだが、とりわけ審判員にとっても、オリンピックは正に〝一世一代の檜舞台〟であろう。

忍耐力と研究心を常に要求される審判員は決してワリのいい役目ではない。しかし、オーケストラの指揮者にたとえられ、ドラマの演出者にたとえられる審判員の努力にも、陽の当る時が来たのである。

▽……いまだかって世界選手権に参加を要請された日本人審判員は一人もいない。だからといって日本の審判技術が劣っているのでは決してない。

西ドイツも、ルーマニアも、フランスも日本を訪れたヨーロッパチームは、外交辞令ではなく日本の審判員の正確なジャッジを賞讃していた。

にもかかわらず、世界の舞台を踏めぬのは、本場ヨーロッパから遠距離であるがために、国際的な実績をつむことがなかなかできないからである。

来年はスペインでIHF主催の国際審判講習会が開かれる。こうした機会を逃さず、日本の審判員が一人でも二人でもミュンヘン・オリンピック要員にリストアップされるよう日本協会でも積極的な対策を講じるよう切望したい。

「全日本選抜」に多数の観客動員を

▽……恒例の「全日本選抜」が近ずいた。

今年の全国大会の成績などをもとに選び出された男女8チームによる激突は、いわばハンドボールの「日本リーグ」であり、事実、毎年関係者の間でも好評をはくす激戦がつづき、その実績によって、今や年末を飾る国内スポーツ界の大きな行事にまで成長している。

ところが、そうした内容の高さに比べ、PR不足のせいか観衆の動員はいっこうに〝伸び〟がみられず、コート上の熱気に反してそのスタンド風景は寒々としている。

▽……『アマチュアなんだ。お客さんの入りなどは……』という考えかたもあるのだろうが、これはカラいばりにすぎない。

よい試合を多くの人に見てもらう努力を〝興行的〟と呼ぶのはとんだ思いちがいだ。むしろこれこそ〝普及〟の第一歩なのである。

ハンドボールは発展したとはいえまだまだなじみのある競技ではない。日本協会がもっと一般の人々に対し〝見せる努力〟〝親しまれる努力〟を示さないかぎり、いつまでもスタンドはガラ空きのままであろう。

ざん新な感覚と企画が今年こそ盛りこまれるよう期待したい。　(S)

年内に"全日本候補"（男子約40名）発表か
地方協会などにも推せんを依頼

新発足の選手強化対策本部（本部長・荒川清美日本協会理事長）では10月以降2回の委員会を開き1年3ケ月後に迫った男子の世界選手権とミュンヘン・オリンピックに対する同本部の基本的な姿勢などについて話しあいを行った。

斯界はじめての、しかも多大な与望をになってのスタートだけに各委員の発言も意欲的特にナショナルチームの選手は、出来るだけ多くの資料と範囲に基いて選考された候補選手のなかから、厳選して決定することが要望として出されたようだ。

これは、男子に限らず女子についても同ようの線を打ち出すことになるわけだが、とりあえず男子に関しては、同本部以外の"目"による有力選手、有望選手の発掘を早急に行うことになり、各県協会に対して候補選手の推せんを依頼するほか、全日本学生連盟、全日本実業団連盟の両加盟団体からも候補選手の推せんを受けることになった。

このため、同本部では11月12日に荒川本部長名で、関係者にあて「推せん依頼状」を発送した。

推せん資格は、今回は男子のみで、実業団、教職員、大学、クラブ（一般）チームの日本協会正規登録者となっている。発送された依頼状は『日本ハンドボールナショナルチームメンバー候補選手推薦カード』とよばれ本人（被推せん者）の家庭環境を含んだ諸調査、球歴のほか『心理診断カード』『体力診断カード』『技術診断カード』の3種の調査書が添付されていることが注目される。

特に『心理診断カード』と『技術診断カード』は推せん者あるいは所属チーム責任者が記入するいわゆる"考課表"だ。

『心理診断カード』は(1)練習好きか (2)忍耐力 (3)競争心 (4)勝負強さ (5)責任感 (6)協調性 (7)公明性 (8)あがり (9)プレーの"読み"の能力、の9項目。

『技術診断カード』は(1)基本技術 (2)戦術的プレー (3)総合判断の3項目があげられ、選手の多角的な調査が希望されている。

これらの資料は、12月10日までに同本部へ送りかえされることになっており、荒川本部長は『三百人近く推せんされるだろう』と見ている。

これらのデーターによって同本部では年内に書類詮衡を行って早ければ年内、遅くとも新春早々に約40名の「ナショナルチーム候補選手」（仮称）を発表する予定。

選手強化対策指導委員の話を総合すると、書類詮衡の基準となるのは今年度各大会（特に全国大会ブロック大会）の成績ということになりそうで、そうした実績が不足している無名のプレイヤーでも長身選手などは、さらに同本部から推せん者へ問い合わせをくり返し"埋れた人材"のスカウトにも万全をつくす。

この40名（予定）が、昭和45年2月フランスで開かれる第7回世界男子7人制選手権出場の全日本代表候補になるわけだが、現在の情勢から推して、ミュンヘン・オリンピック第2次強化候補選手（注・第1次は昭和41年8月、中共ナショナルチームの来日に際して男子28人が発表され、このなかから15人が昭和42年1月の第6回世界男子7人制選手権の全日本代表となった）に同時指名されることはまちがいなく、慎重な審査を望む声とともに、その成果に大きな期待と注目が集っている。

なお、同本部の意向では、候補選手が出そろったあとは、早急に強化計画をねりあげて、その線にそった指導を進めていく方針だが来年度に予定される国際試合などの全日本代表はすべてこの候補選手のなかから選抜されることになろう。

大崎電気が欧州遠征計画

大崎電気工業・渡辺和美社長（日本協会副会長）はこのほど、同社男子チームを来年4月から5月にかけて、ルーマニアへ遠征させる計画のあることを明きらかにした。

体協評議員に西副会長

日本協会では体協評議員に西敏郎副会長（慶大出・全日本学連会長）を新任した。

これまでは前会長の鈴木達雄氏が、会長辞任後も後任が決まらぬままつとめていたものである。

「公認審判着」できあがる

かねてから、日本ハンドボール協会審判委員会で試作していた公認審判着ができあがった。

これは四十二年十二月に開催された審判部合同委員会で「B級以上」の審判員は必らず着用すること、「C、D級」審判員は希望すれば着用できるという決定にもとずいて新しく制定されたもの。購入について審判部では次のように希望している。

一、見本を一揃各ブロック審判部長宛送ってあるので希望者は各都道府県協会あてに送ってある註文票に必要事項を記入の上各県協会でまとめてお申し込むこと。その場合、「控」は貴協会で保存し、註文票と同時に現金（一セット二、五〇〇円）を同封すること。

一、納入については註文票名簿、サイズ、現金照合などがすみ次第一括して各都道府県協会責任者あて送ります。

一、審判着は一セット単位で申しこみをうけます。一セットとは審判着、パンツ、ストッキングの3品で、サイズは「L」「M」のみです。なお、「L」「M」が合わないかたは「特註LL」を申しこんで下さい（註文により製作）

※

また、審判部では、審判用シューズについても受注することになり、申しこみをうけている。

これは革製黒色で、サイズは二二・五センチから二七センチまでの各種。価格は各サイズとも二千円。受注後に制作のため納品までに時間が少々かかるということである。

全日本教職員連盟（仮称）結成へ

かねてから連盟組織の設立が望まれていた教職員チームの連盟の設立準備委員会が12月7・8日清水市で開催されることになった。

従来全日本規模の大会をもちながら、組織のないため、大会日程の決定が遅れがちであり、またその間の連絡などについても十分でないうらみがあった教職員関係の組織として設立が関係方面から望まれていた全日本ハンドボール教職員連盟（仮称）結成の動きが今夏から具体化しはじめていたが、更に今回、文部省から国体縮少という方針がうちだされ、国体教員の部を夏季大会に移すか、文部省主催の全国大会にするかという具体策が提示されたこともあり、こういった方向に対処するため、全日本教職員の組織がどうしても必要になってきたため、よりその結成が具体化した。

準備委員会は山田計日本協会常務理事、片瀬喜代治静岡協会理事長などが中心になって、全国9ブロックから推薦を受けた委員によって、開催される。

これら各ブロックから推薦された設立準備委員は12月7、8日に清水市に集り、同地で第一回の会議を開き、その席上で、連盟の発足に必要な規約の制定、人事などの問題について、討議し、来春より、連盟がスムーズにすべりだせるように準備を行なう予定。

この連盟が結成されると、日本協会は四つの連盟をもつことになる。この連盟の下に教職員組織が強固になり、ますます発展していくことを望みたい。

複審制採用に関しての
審判講習会予定さる

今回のIHF総会の決定で規則の変更がなされたことは別掲のとおりであるが、この中で、もっとも大きなことは複審制の採用であろう。

IHFの総会決定をうけて、IHF競技委員会はかねて数ヶ国に依頼して検討してきた結果と、自ら国際審判講習会で検討してきた結果をあわせ、まとめて、複審制施行の際のあり方を示す「複審制規範」というべきものを示した。

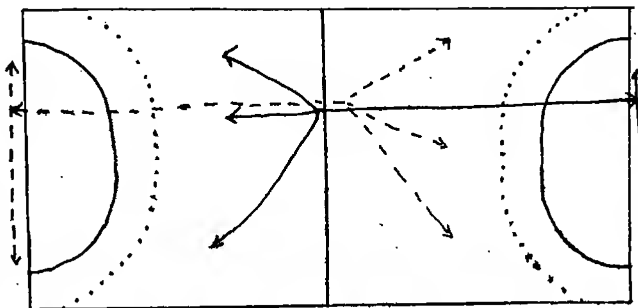
日本協会審判部では、ことの重大性にかんがみ、この規範について、早速検討をはじめている。

12月中旬には、東京で、ブロック審判部長会議を開き、細かく複審制についての問題を検討し、来年度の実施を前にして明年早々東京で審判員中央講習会を開き、複審制の詳細に関し、講習をする予定にし準備を進めつつある。

大体の複審制の内容は、二人の審判が図のように動き、それぞれが対等の権利をもち、自分の見える範囲について、責任をもつことになるが、二人が管理することになるのだから、二人の意志の疏通が図られなければならない。

この制度が採用されることになれば従来のゴールジャッジは廃止されることになる。

Aレフェリーは図の実線のように動き、右側のチームの攻撃の時には、左側のコートに入り、従来のレフェリーのとっていたような動きをし、試合を管理する。右側のチームが守っている時はゴールポストの側にたち、自由に動きながら、ジャッジする。



Bレフェリーは点線のように動き、Aレフェリーと同様に動き、同じようなジャッジをする。

以上が基本的な状態になる。

二人で審判が行なわれるのであるから、十二分の規則解釈の統一同様の運動能力、同一の性格などジャッジの統一を考えなければならない課題が多い。

こういったことの解決にはなるべく多数のレフェリーが一堂に会することが必要となろう。

複審制採用決定

—IHF公報より—

去る8月30日にアムステルダムで行なわれたIHF総会の決定事項がIHF公報によって、送られてきた。

内容はすでに荒川理事長の談話などで述べられているが、正式な通知に基づき、ここに紹介することにする。

今年の第4回女子7人制世界選手権問題、すでに本誌58号に紹介した執行陣については省略することにする。

競技委員会も全員留任

執行陣は既報の通り全員留任したが、競技委員も全員留任した。▽技術委員会委員長　エミール・ホルル（スイス）、▽技術委員　アクセル・アーン（デンマーク）、マリヤン・フランダー（ユーゴー）ヨアン・クンスト（ルーマニア）ジーグフリード・ペライ（西ドイツ）、ルネ・リキャール（フランス）、クルト・ワドマーク（スウェーデン）

11人制男子世界選手権は西ドイツで

11人制界子世界選手権は西ドイツで来年開かれることが再確認された。これには、米国、オーストリー、オランダ、スイス、ポルトガル、西ドイツが少なくとも参加するものと見られている。

1970年の男子7人制世界選手権の再確認

1970年の世界選手権は行なうことが確認された。詳細な1969年の春に行なわれる予定の競技委員会、理事会で決定される。

国際審判員講習会はスペイン、コーチのためのシンポジュームはスウェデン

1969年の国際審判員講習会はスペインで開催が決定された。また各地から期待されているコーチのためのシンポジュームは1970年にスウェーデンで開かれることが決定されている。

1970年の総会については、多くの国が立候補しているので、近いうちに理事会で決定することが確認されている。

イタリー、レバノンが新加盟

イタリー、レバノン協会が新しく加盟を許され、IHF加盟国は41ケ国になった。

また、イギリス、上ボルタ、カメルーン、コンゴブラザビル、コンゴキンシサナ、クエイト、リビア、マダガルスカルの8ケ国の仮加盟が承認された。

規約の改正は選手の条項

第43条に2が新設、IHFが失格とした選手は、その所属国でも同時に失格となる。同様に所属国で失格とされた選手はIHFでも失格とする。

第45条に2項が新設され、従来の2、3はそれぞれ3、4となる。

スポーツの権威によって罰っせられた選手は、2年たたなければ復権しないことになった。

競技規則改正

1条2　ゴールは従来木、で作られていなければならなかったが、同様の材料ならば構わないこととなった。

3条1　1チームは12人（内ゴールキーパー2人）によって構成される。

17条1　競技は二人の審判によって管理される。

これにともなって、4、5、12、14、16、17、18に変更ができてきたこれは非常に大きな変化であろう。

20×40m正式の大きさに

世界選手権規定及びヨーロッパカップ規定についても手直しが加えられたが、このうち競技に直接関係あることは、グランドの大きさが明示されたことであろう。

従来、マチマチであった世界選手権のグランドの大きさが統一された。日本では現行のままの大きさなので変化はないことになる。

また従来あいまいであったヨーロッパ杯の一回戦もはっきりと、16チームを越えた場合には、必ず予選を行なうとして明文化された。これによって、一回戦か予選かという問題が常についてまわっていたが、その問題も解決されよう。

今回の総会で、もっとも大きいことというのは、世界選手権、ヨーロッパ杯の中止であろうが、複審制の正式採用という大きな競技規則上の改正ということもとられている。

オリンピックに関しては、男女開催を要望するというだけで、男子16チームになるか、男女8チームになるか、男子16、女子8チームになるかの結論はでていない。いずれになるにしろ、1970年の男子世界選手権ベスト8に1972年のオリンピックの参加権が与えられることは確実である。

このためには勝っことが必要である。

球界パトロール

流会した二つの全国会議（評議員会・理事会）

▲……10月初旬福井県高浜町に招集された全国評議員会と全国理事会がいずれも出席者及び委任状が規定数に達せず流会となり、話合いの場に終ってしまったことは球界に大きな反響をよんでいるようだ。

全国評議員会はこれまでにも何回か流会寸前となり、出席者の少ないことでは定評（？）があったのだが、今回のような事態ははじめて。日本協会では同会議に提出を予定していた議案を文書で発送し承諾を求めて〝議決〟することにしたようだが、ミュンヘン問題をはじめ内外に解決・協議すべき問題が山積している時期だけにこのような状態は好しくない。

▽……各組織の評議員はスポーツに理解のある地元の名士が大半で、それだけに公私両面で繁忙なかたが多い。『地方での会議などにはとても出られませんが…』とはじめから〝権限放棄〟で就任される人もかなりの数だ、と聞く。日本協会規約（後掲）ではその補てん手段として副会長に代理出席の権利を与えているが、この点があまり徹底されていないのも問題であろう。

▲……評議員側からの注文も少なくない。「平生どのような活動をしているのか、そのインフオメーションが少ない」というのはなかでも強い声だ。『どうも加盟金などの督促状ばかり舞いこむようですナ』という会長氏もいる。

現在、日本協会では常務理事会などの議事録を半期分まとめて報告しているようだが、これをそのつど送付し、執行部の動向をたえず連絡するといった方法も考えられてよかろう。

▽……全国理事会が流れてしまったのも珍しいことだ。

『気にはなっていたが時間の都合がつかなくて』というのが大部分の欠席の弁だが、「国体に便乗すると辺びな場所になることもあるのだから全国理事会は必ず東京で」という意見も多い。

ともあれ、球界の施政に影響する二つの会議が成立しなかったことは理由はどうあれあまりにもルーズだ。

いささかその運営・企画面が動脈硬化症状の日本協会で、年に1～2度という貴重な会合を無為に終らせてしまったことには反省を求める声が大きいし、協会規約の全面的再検討の動きもこれでいっそう強くなりそうな雲行きだ。（杉）

（注）日本協会規約によれば評議員会と理事会は過半数の出席をもって成立し、議事は出席者の過半数の同意を経て決定する（第7条3項並びに第9条2項）

なお、評議員は文書をもって他の評議員に権限を委任することができるし（第7条4項）、各組織または各加盟団体の副会長（高体連の場合は副部長）を評議員会に代理出席させることも出来る。

●大崎電気—全立大、田村紡—大崎電気の争いか
（男子）　　　（女子）

—第15回全日本選抜選手権近づく—

第15回全日本選抜ハンドボール選手権大会はＮＨＫ後援で12月18日（水）～22日（日）までの5日間、千駄ケ谷の東京体育館に於いて開催される。出場チームは別表のように決定したが、全国から選抜された強豪揃いで連日熱戦が期待される。（22日16時～18時ＮＨＫ教育テレビで放映予定）

大会は18日～20日の3日間は、10時から各組に別れての準決勝リーグが行なわれその上位2チームによって、21、22の両日は13時10分から決勝リーグが行なわれる。

予想

男子Ａ組で、まず決勝戦に進むと考えられるのは、大崎電気であろう。飯田、近森、籏野の加入によって、チーム力にぐっと厚みが増した。ベテランと新人の呼吸があい、竹野、近藤の好リードもあり、ＧＫ福本の好守も含め、守備陣もきわめて安定している。

ついで有力視されるのは日体大であろう。ＧＫ本田の好守は定評のあるあるところ。守備陣のツメも一流だが、攻撃が調子の良い時は良いが、安定度にかけている。このあたりをめつきり力をつけた中大、上り調子の大阪イーグルスがつけば、決勝リーグ進出も可能であろう。

男子Ｂ組は全立大の進出はまず堅いところであろう。現役の立大もきわめて安定した力を誇っており、これにＯＢの木野、北村が加わり更に安定度はまそう。総合選手権でもきわめて安定した力をしめした。これに続くのは、秋のリーグ不振であったとは云え、力をもち選手権試合には、きわめて強い芝工大であろう。三景、埼玉教員は芝工大の不調につけこむとこが決勝リーグ進出の道となろう。

結局、破乱なく進めば、優勝は大崎電気—全立教の争いとなろう。総合では全立教が制したが、近森の加入、ネデフ氏のコーチで大崎もチーム力が上昇している。白熱の一戦となろう。

女子Ａ組の田村紡の決勝進出はまず堅い。これを阻むチームは見当らない。次にどこが決勝リーグに進むかはきわめて興味深い。重機が一歩先じているように思われるが、日体大、菊池農高がこれにどうからむかが焦点になろう。日体大が総合で見せた喰い下りを見せればあるいはの場面もあろう。菊池農がもつている自信も固くなることがなければ、あるいはとの場面もおころう。両チームの健斗を望みたい。

女子Ｂ組は大崎、三菱の決勝進出は固いものと思われる。現在の中京大、東女体大の力ではこれを阻むことは無理のようだ。大崎・三菱は東京選手権で大崎が立ち上りの速攻を利して、勝利を握っている。若い三菱がこの敗戦をどのように処理しているかが問題だが大崎が一歩先じていよう。

優勝は大崎—田村で争われることになろう。大崎はチーム力があがっており、田村紡も国体の苦杯から立ち直っていると考えられるので両チームの争いはきわめて興味深いものとなろう。勝敗はその日の調子ということになろう。（藤本）

出場チーム

男子Ａ組

大崎電気（埼玉）
日本体育大学（東京）
大阪イーグルス（大阪）
中央大学（東京）

男子Ｂ組

全立教大学（東京）
芝浦工業大学（東京）
埼玉教員（埼玉）
三景（東京）

女子Ａ組

田村紡績（三重）
日本体育大学（東京）
東京重機（東京）
菊池農業高校（熊本）

女子Ｂ組

大崎電気（埼玉）
三菱鉛筆（神奈川）
中京大学（愛知）
東京女子体育大学（東京）

選考経過

今年度も選考はかなり難行し、四日間も議論が続けられ、決定に至った。その間、十二チームにする案、六チームにする案等々の案も提出されたが、結局八チーム案にまとまった。まず選抜大会の性格自体の議論に移り、現状に於けるベスト8とするか、各種別の上位チームによる大会とするかについての討論があり、理想は現状に於けるベスト8であるが、そこまでは今年はいけないので、理想の線に少しでも近づけるようにすることになった。そこで昨年より、最近の成績が重視されることになった。

その結果、各種別にまず本年のワクを考え、その中から実業団、学生、教職員別に選考することになり、男子は実業団2、学生4、教職員2ということになり、それぞれ各種別から考えられ別掲のチームが決定された。

各種別の大会1位はそのまま、推薦することとし、全立教、大崎電気、日体大、埼玉教員がまず推薦され、ついで実業団からは、国体2位、実業団3位の三景が、学生からはインカレ2位、総合3位の芝浦工大、現今の関東学連のレベルの高さを考慮に入れ、春秋とも関東学連3位の中央が推薦されることになった。教職員は国体教員の部1位、教職員2位の大阪イーグルスが推薦されることになり、8チームが決定した。

女子は実業団5、学生2、高校1とし、実業団から本年度二冠の大洋デパート、田村紡、大崎電気、三菱鉛筆、東京重機が推薦されることになつたが、大洋デパートが辞退したため、ブラザー工業が代って推薦されることになったが、これも都合で辞退することになった。

また、学連からは、本年度インカレ1、2位の日体大、中京大が推薦された。高校は今年度抜群の力を見せて、インターハイ、国体とも大差で優勝した菊池農高が推薦されることになった。

大洋デパート、ブラザー工業の辞退によって、インカレ3位の東女体大が推薦され、別掲の8チームが決定した。（Ｆ）

国体における

高校選抜編成の諸問題

今年の国体から高校部門も選抜（混成）チームの出場が認められるようになり男女あわせて10県が新規程をさっそく採用した。

その結果、男子は全静岡が兵庫選抜を破って初優勝女子はベスト4のうち三つを〃選抜軍〃が占めるという成果をあげ関係者の注目をあびた。

近い将来に予想されるジュニア・ナショナル結成の足がかりになるものだ、などとその反響も大きいが、編集部では国体出場を果した各県監督にその経過などを聞いてみた。——（到着順に掲載）

静岡県（男）の場合

～その優勝まで～

平岩　魁

これまで東海ブロックにおいて桜台、中京（中京商）などの愛知勢に敗れ、国体に出ることができず無念の涙を流し、打倒愛知を目標に県協会が一丸となり選手強化に力をいれたかいあって今年は一般女子を除く4部門が出場権を得た。

標題にそって、高校男子のチーム編成から優勝までの経過をたどってみたい。

選抜にするか、これまでどおり単独校にするか最初に論議されたのは4月13日の県協会総会及び常任理事会席上であったが、結論を得ず、次回の常任理事会に持ちこされた。

なにぶん初めての試みでもあり容易に結論の出る問題とは思わなかったが、予想以上に難しいテーマであった。

結局、5月29日の常任理事会で高校男子はもとより他の4部門もすべて「県選抜」を編成する大方針が決まった。

『強いチームを造る』という意見が他の一切の意見に優先されたわけで、選抜方法などについても次のように決めた。

1、国体は県選抜による「全静岡」を5部門とも結成する。

（選抜にした場合の方が、より強力チームが結成出来る理由）

2、県総合体育大会上位四チームにより国体県予選を行う。（県スポーツ及び各地区大会の成績も参考にする）

3、国体県予選優勝チームを主体にして編成する。

4、選手選考は優勝チーム監督を加え常任理事会で行う。

5、監督・コーチ・マネージャーの人選を行う。（監督は常任理事より人選する原則）

▽6月15・16日県総合体育大会高校の部（於静岡農高）の結果清水商、浜松南、静岡東、三島南の四校が国体県予選出場権を獲得し、大会まで各チーム単位で練習を行うことと優勝チーム（清商）は全国総体及び東海総体に二位（浜松南）は東海総体出場が決定す。

▽6月29日・東海総合体育大会が岐阜西工高で行なわれ清水商が中京（愛知）を降して優勝。浜松南は3位に入り、この両校の活躍はわれわれに大きな希望を与えた。

▽7月14日・国体県予選について監督、主将会議を行う。

▽7月28日から広島で開かれたインターハイで清水商は1回戦で下関中央工と対戦して敗れた。ポストプレーにこだわりすぎてチャンスをのがしていたことを反省。

▽8月11・12日・国体予選（選手選考会）を清水商ら前記4校にて行い、ただちに選手団編成を行う

監督に平岩（富士高教員・県常任理事、高体連部長）、コーチに渡辺（清水商コーチ）を決定。

予選会優勝の清水商から森切、岩崎、杉山英、望月、渡辺、杉山昇、池田の7名を決めたが、その他の選考は難航。結局、変則シュートの長谷川（浜松南）フェントおよびクイックシュートの片山（浜松南）ロングシューターの杉山広（静岡東）GKの新村（浜松南）、と各人の特徴をいかして選抜す。

なお、県立吉原高浦部秀夫校長（県高体連副会長・東部地区、地区長）の好意により出場校々長に事前に連絡していただき了解をえる。（選手選抜決定について）

▽8月14日・国体東海地区予選、県監督、コーチ及び出場校顧問会議を開き同協会全体としての合宿日程及び練習会場、練習試合、宿泊所、経費等につき意見調整を行うも、まず東海ブロックに勝たなければ本大会に出場出来ないので第一次合宿に全力をつぎこみ、チームワークを主として、練習試合を豊富に行い。選手の特徴をいかすことに中心点をおく。

▽第一次強化練習（8月17～21日於清水商）清水、静岡市内に在住する生徒が多いため浜松南高生は市内に宿泊させ他は通学させ午前午後二回に分けて、一般男子（全静岡）や静岡教員、来静中の慶応大、羽水高（福井）などと練習試合。これが強化に大いに役立つ。

また清水商一、二年生の献身的な協力もみのがせない。

▽8月24、25日・愛知県体育館で東海地区予選会が開かれ愛知代表中京に14―13、岐阜代表・加納に16―11で勝ちついに念願の国体出場を果せた。本大会まで選手は各校に戻して練習と決める。

▽9月6日一般男・教員・高校男・女の監督コーチ会議を開き第二次強化合宿日程について検討した。

結団式・出発時間・経費等の調整も終って県協会長斎藤敏之氏の激励会があり一同大いにくつろぎ栄養補給をする。

▽9月14、15日・福井県遠征試合。羽水高が春夏二回清水市にて合宿を行い。その関係もあり福井県ハンドボール協会の好意により高校男・女経費一切地元負担で招待して下さるとのことで監督、選手一同よろこんででかける。

▽第二次合宿（9月21～23日）21日結団式に全員参加し、県知事より県旗の授与をうけ、新しいユニホーム、ズボン、帽子等を支給され、気分を新たにする。又教員団、吉田定静氏（浜松南高教員）が県選手団の旗手をつとめることに決定し、関係者にとり大いによろこぶと同時に、なんとかしなければと、おたがいにちかいあう。市内にて合宿清商一・二年生、教員団、一般男子と練習試合を行い最後の調整を行う。

▽9月30日・出発。県選手団と国体臨時列車に乗車し十五時着、コ

ーチに選手の練習をまかせ監督代表者会議に出席する。そのあと旅館にて選手とミーテングを行う。

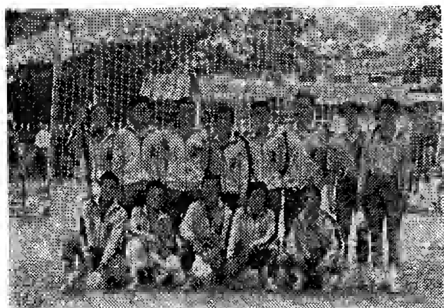
選手は高校時代の思い出に総合開会式に参加を希望するも総監督、監督、コーチと相談の結果以下の理由により断念させ、コーチにまかせ十一人のみ残り練習させる。そのかわり我々と補欠選手が代表で参加することにした。その理由は次の2点である。

①くじ運がよく一回戦不戦勝のため十月一日総合開会式、二日開始式となると中二日練習が出来ない。

②往復（式の時間及び待機時間）時間、十一時間で選手が疲労する。

との理由で勝つために我慢させる、そのかわり帰路天の橋立、京都を回ることを約束する。

試合成績は左の通り一戦一戦苦



戦の連続で決勝戦等は第二延長まで行い、二転、三転してやっと勝利をつかむ。（注・試合記録は本誌前号参照）

試合終了の「ホイツイスル」が鳴った時、苦しい斗の連続と同時に選手の健斗により優勝の栄冠をかちえた喜びが複雑に脳裡をかけめぐる。「ヤッタ」と云う実感が胸にこみあげてくる。片瀬総監督、渡辺コーチとだきあってよろこぶ。応援にかけつけてくれた、副島清商校長、県体協本部役員・その他県一般男子・教員・高校女子選手一同涙を流して、わがことの様に喜んでくれた……。

帰静した10月24日、県体協主催の解団式にのぞみ知事より賞状、体協より記念品を授与され栄光の思いを新たにする。

来年度にそなえ10月19・20日富士高にて県高校新人戦を行う。又11月23・24日には県総合選手権（静岡市）、高校地区室内大会等試合の連続でゆっくり反省する機会がなく、おたがいに試合においまわされている感じがする。

なお出場選手の大学進学、就職問題等希望が達成出来るよう助力してあげたい気持でいっぱいである。（静岡県高体連部長）

兵庫県の場合

幸田　宋之

一、チーム編成

県予選終了時に話し合いにて編成。選抜と云うより補強の形をとった編成内容である。

優勝チームの監督一任と云った形でそのチーム主体のメンバー構成である。

二、練習等について

当チームの練習は割合いやらず、国体十日前までぐらいは各校に於いて練習をやらしコンディションの調整を特に注意した。

十日間程の合同（チーム）練習で時間的には約二時間程度。

九月は各校共学校行事が多く練習日、時間に制約された。

練習内容としては基礎的なものは除き主としてコンビネーション、フリースロー等に重点をおいた。

三、何故選抜に……

当県としては年度初めより今年はこの線では…と話題になり優勝校の監督にその権限を一任と云うことになっていたので急に決めたと云うことでもない。

選抜にした理由としてはやはり国体出場が目的である以上勝つことが先決、県内の力としてはブロック予選には単独校では勝てないことが明瞭であったし大体の線は選抜にしてと云う気持であった。

四、今後における課題

県協会及び高体連のバックアップがあってこそ選抜チームものびのびと練習も出来るであろうし、各校先生（顧問）方の理解も必要であろう。選抜チーム編成の条件としては、

イ、練習に集まる為の時間的な問題。（練習会場校の距離）

全県内より選抜した場合練習に支障があり連日の練習は不可能であろう。遠距離校よりは選ばない方が適当かと思う。

ロ、晴雨天に、又照明設備等完備された練習コートの点。

時間的に制約される場合が多い為練習開始時刻等が不定の為夜間練習に入る場合も多くある。

ハ、指導者陣の構成内容

選手に信頼される指導者のメンバーが先ず第一と思う。

指導者の練習計画に従い、それを信頼して練習に励める様な環境状態に持って行く。

ニ、選手同志の気持（精神的）のとけ合い。

一つのチームの新編成であるから各個人の性格、くせ等を知りそれを上手に導き乍らチームワークの問題を解決して行く。（兵庫選抜軍監督）

山形県の場合

矢作　久茂

山形の場合は、単独校による国体予選のあと優勝校の監督が補強（充）選手を決めることとし、結果的には大石田高（優勝校）に東根工のGKを加えたにとどまりました。

東北ブロック予選は大石田高単独で出場し、優勝を飾ることが出来ましたが、FPを混成にすると短時間にコンビネーションをととのえることが出来ない、と考えたのがGKのみの補充ということになったわけです。

選抜（混成）にした場合、チームとしての練習もなかなか出来にくいでしょうが、単独のために練習も一日平均三時間できました。

選抜にするには練習の問題・経費の問題があるのでサブキーパーだけを補強しました。

福井国体で選抜チームが好成績をあげましたが、はたしてチームゲームが選抜にして（高校）の場合よいものでしょうか。

選抜に成ったために色々な問題や弊害がでてきております。たとえば東北選手権大会がなくなりました。

国体を拠点にしてかんがえた場合インターハイ県予選で国体選手を決定し早くから練習する事もかんがえられる、そうすれば県の予選会も必要でなくなってくると思います。

それればかりか学校のクラブ練習は大きくゆがんでくるような気がしてなりません。

たしかに各チームよりすぐれた。素質をもっている選手をピックアップして練習さえできれば好

チームができあがることは目に見えることです。

しかし山形県の場合、指導者も少なくだれがまとめてくれるか、指導するかさえけんとうがつきません。

チーム数の少ない県ほどくるしく成ってくるようです。

できれば前にもどして学校対抗にしていただきたい、そうする事によって色々な問題が解決されると思います。（全山形・大石田高校監督）

チームの和調整が課題　女子

静岡県(女)の場合

渋谷　行康

一、何故選抜にふみきったか。

ここ数年来国体高校代表権を愛知勢にとられ、本大会への出場は当分断念という消極的状態であった。

今迄のブロック予選を見ると決勝迄進出しながら、あと一歩の力と駒不足の為に敗退したケースが多かった。静岡協会としては片瀬理事長を中心に何とかブロックの難関を突破して国体代表権を静岡にと再三協議を重ねた。幸い第23回国体から選抜チームが認められる事になったので単独チームに対する未練や、練習の問題、選手の掌握等多く問題はあるがとにかく県選抜チームを編成することが現時点で目標に到達する最大得策であるとの結論に達し5種別全部を全静岡とした。結果は4種別国体出場と県協会創設以来の快挙となった。いずれにしても片瀬理事長の執念的大英断であろう。

二、チームの編成について

静岡は6月中旬にインターハイ予選を行ない、上位4チームを8月12日の国体選抜選考試合に出場させ、そこで協会常任理事と優勝チームの監督とで選考した。高女はその結果、清商4、城北5、吉原5、清女1計15名を候補選手とした。そして東海ブロック予選前の合宿に参加させ、最終11名を監督が決定することにした。しかし残る4名も対外試合には同行させることを認めた。コーチには清商クの三ツ井氏を決定した。こうして一応の編成をし、遅まきながら8月16日から合宿に入った。まずポジション別の特技を重視すると共に、身長の平均をねらうとして正選手を選んだ。そして選手配置はFPセンター2、45°、各1、両サイド、各2、ポスト1、GK2、にした。学校別では、清商GK1、FP3、城北・FP、4、吉原・GK1・FP・2、とした。

そして、各ポジション7人は殆ど固定して練習させることとしたが、女子には生理的特性で好・不調の波があるので、その対処策として、控には斗志のある、いつでも試合に出られる気構へや、ここ一発の時点で得点出来るいわゆる勝負感の良い選手を置いた、結果は予測どおり大当りであった。

三、練習について

選抜チームの悩みは練習であった。合同練習は限られるし、練習時間も会場への移動で充分でなく、しかも土、日にやらざるを得ない。

したがって練習の大部分は平日の所属校での練習とした。所属校での練習はチームプレーは不可能の為走り込みとシュートに重点をおかせた。その為選手に、県代表選手であることの自覚、課せられた使命等精神面の持ち方を強調し、私生活における態度に迄細かい指示を与えた。又合同練習時には、所属チームのカラーや、個人的なプレーは一切出さないことを約束し、とにかくはだかになって全静岡選抜選手になりきる事を強く指導した。したがって、一次合宿の2日間は、同化させる為徹底的に鍛えた。選抜選手を短期間に一体化させるには、最初にきつい練習をさせ、お互に協力させることが女子の場合心理的にも良法であろう。結果一日目の後半の練習で80%のまとまりを見た。

全練習を通じ走る事。シュート力をつける。合わせ。この三点を重視し、他は練習試合を行なった。

練習日程

8月12日〜候補選手決定
8月16日〜20日　第一次合宿
8月24日〜25日　東海地区予選
9月7日〜8日　練習会（東海予選後、初練習）
9月14日〜15日　高浜に遠征
　一般高校女子と5試合消化
9月21日〜23日　第二次合宿
9月29日　国体出発

結局ブロック大会、高浜遠征を含めて合同練習は延14日間ぐらい（土曜は約三時間）他は所属校の練習であった。いずれにしても抜群のチームワークであった。

四、今後の選抜の課題

a　各ポジションに高度な同一レベルの技術をもつ選手を、むらなく配置するには、その質から考えても単独チームより選抜チームの方が良いのは当り前である。女子の場合特有の個性と小集団性をもっているので各校3〜4名3校ぐらいからしぼって選抜するのが精神的な面や、人間関係から考えてものぞましいと思われる。

b　家庭生活、学校環境、練習内容の異質なものが集るのでこれを精神面ではやくなじませ一体化させることにむずかしさがある。前にも述べたが練習の場合単独なら練習場に行く時間もかからないし、毎日揃って練習出来るが選抜はそうはいかない、次回の練習日迄全く個人にまかせてしまうので選手が強固な意志をもたぬとその度に最初からの繰返しになり効果があがらない。

私はチームの編成から、国体迄43日間に14日の合同練習のみでしかも女子の為、どうなる事かと心配であったが、与えられた期間に期待にそうチームに作り上げるには選抜選手の経験や技術のすぐれた面をその度毎に素直に伸ばすこと。

そして個人のクセをなくさせることによって解決しえたといえる。

c　15人の候補選手から11人にしぼる場合選手が感情的に不満を出す恐れがあるかもしれない、それに対しては良く状態を理解させる必要があろう。同一、同格の選抜選手であることを自覚させ和を強調し全員一般生活では常にサロン的ムードにおくことが重要であろう。

d　監督・コーチの問題もある。単独チームなら楽であるし高校生は監督の言は絶対的に受けとるだろう。しかし、選抜チームとなるとむづかしい、監督が選手から全

面的に信頼されるには、技術・作戦・経験が豊富なことと、特に女子の場合は人間的要素に重大なポイントがあろう。往々にして自分を認めてくれる人には接近する。そういうとき所属チームの監督に心移りをさせたら失敗だ。全静岡の選手は準決勝に於て見事に監督の期待にこたえてくれた、これは御互の信頼度からでたものであろう、したがって選抜の監督は本当に大事な場面で交替選手を信頼し、全運命をたくせるだけの把握と大バクチも必要ではないか。

e 選抜選手の所属校との連絡。練習にしても、合宿するにしても密度の濃い連絡をすることにより手元から離した学校チーム保護者に一沫の不安も与えないように監督は細心の配慮をすべきだと思う。

特に女子の場合に云える（静岡女子高校選抜監督）

岩手県の場合

高橋　正儀

今年の国体で最も注目されたのは高校部門で最初の試みとして採用された「選抜」という方法だったと思う。

各県関係者もいろいろな問題点があり、躊躇した事と思うが、結果として今大会出場の高校男女共に、十チーム中五チーム迄が選抜であり、特に、高校女子を例にとるとベスト4に勝ち残ったのは、菊池農高を除いて全静岡、千葉選抜、全岩手と3つまでが選抜という事実であった。

この事からして今後残された問題はあるにしても、今大会の成功によって選抜を取り入れる県が多くあると思うが、本県の例、今後の問題点等を考えてみたいと思います。

一、チーム編成の決定、時期

本県としては、県民大会前から選抜でチームを編成する事に決定しており、たとえ優勝したチームでも全員が選ばれるとは限らず、一回戦で敗れたチームからでも優秀な選手がおれは、多く選ぶという方針であった。そして、7月中旬の県民大会終了時に、45年岩手国体の選手強化を目的として組織された強化委員によって、花巻南高と花巻農業高校を中心に選手が選ばれた。

二、練習について

今回選ばれた選手、指導者は花巻市内の学校であった為、合宿は勿論、練習も毎日合同で行う事が出来、まとまってやりやすかった。合宿は東北大会、一週間前に一回だけ5泊6日の日程で一日6時間、主にコンビプレーを中心とした練習をし、合宿後の毎日の合同練習は二時間行った。

三、今後における選抜の課題

㈠どういう基準で選手を選ぶのか各ポジションごとに選ぶのか、例えば同じタイプの選手が二人おるよりは、異ったタイプの選手が二人いた方が良いし、又短い調整期間の問題からしても、ポジション事に選んだ方が良いと思われる

㈡練習、指導者の関係から選手を全県下から選ぶのか、最小の地域から選ぶのか。

成程、全県的に集めた場合は選手も揃うでしょう、しかし、選抜で大切な事はチームワークの問題だと思う。又合宿、練習等で折角コンビがとれても、元のチームに帰った場合、大会前に調子を取り戻す為には時間がかかり、チームワークの面でも考えなければならない事と思う。そういう点で同地域の者であれば、合宿以外にも毎日合同練習ができ、自然とチームワークも生まれ、選抜から残された部員も一諸に練習を見る事ができ指導者もやりやすいと思うし、又選抜チームの監督、コーチについても同地域の指導者が、指導するのが良いと思う。

㈢選抜時期について

新人大会後に選手をしぼり、年度初めに発表するか、或は、県予選後に決定するか、

年度初めに決定した場合の幣害として、国体ブロック予選前に、高体連等の試合がある事だと思う、学校対抗で頑張っている残された選手はやる気をなくし、選抜された選手も折角の意気込みも、その学校のチームワークを乱す結果になるのではないか「又県大会が遅い場合は調整期間等の問題で選抜は無理と思う、今年の東北大会に選抜で参加した県は岩手だけで、あとの県は県の大会期間が遅った為できなかったと聞いている。

そういう点からもブロック予選

▽……「最初の年にこれほどの結果が出るとは思わなかった」というのが、国体終了後に日本協会役員が語った感想である。

単独校に対してどこまで食いこむかというのが大会前の予想であったのだから、男子1、2位、女子の2、3、4位を選抜チームが占めたのはたしかに上々の成果であった。

▽……「チームワークが身上の高校界に選抜とは……」といった反対論もすっかりカゲをひそめた感じだ。今年の情勢をみたうえでという慎重派の県も多かったことから、来シーズンはさらにこのシステムが推進されるだろうが、各県からのリポートを読んでも、必ずしも円滑な条件ばかりとはいえず、むしろ問題点が多い。

▽……特に合同練習についての課題と悩みは共通しているようだ。指導方針、地域性、学校差などがうまく調整されていないと足なみを揃えることができない。

ある協会の役員は『全県下からの選抜というのは、絶対にムリだ。県内を地域別に四区ぐらいに分け各区ごとに選抜チームを編成し、そのチーム同士で予選を行い、その勝者に「県代表」の名前と資格を与えるほかはないだろう』という。

▽……初年度ということで破たんはなかった、むしろ来年度以降にやっかいな問題が出てくるといった悲観論もあるが、日本協会では逆に『混成にあたっては各県それぞれ違った方向で進むと思うが、最優秀校に他校の有力プレイヤーを加える方法が多くなるだろう』とみており、埋れた逸材をこの機に大いに探し出そうと期待をかけている。

各県のセレクションマッチの報告を集めてジュニア・ナショナル（仮称）編成の参考資料の一つにすることもできるだろう（荒川理事長の話）

男子決勝終了後、優勝した全静岡の選手が『このメンバーでいつか一般でも優勝したいナ』といっていたのを聞いてある役員は選抜制度は成功したと思ったそうだ。

郷士愛——といった〝予想外の成果〟も若い選手の心に植えつけられていたのである。（S）

一ヶ月前に県体をやり、終了後に選抜にするか、単独チームにするかを決定した方が良いと思う。

㈣練習について

選抜の方法によって練習内容も変ってくると思うが、まず基礎ができている事を前提にやらなければ期間等の問題や、休暇中の練習は良いとしても授業日の練習が、二時間位いなので無理のように思われ、従って、コンビプレーを中心に行い、混成チームの欠点と思われるチームワークを重点的にやった方が良いと思われる。

㈤遠征試合について

折角の練習成果も試す機会がなければ不安である——、県の選抜であるので県内には主力を抜いたチームしか無く、又選手の志気からも県外遠征試合は絶対必要と思う。

以上、思うままに書いてみたが、今後の参考になれば幸いと存じます。（全岩手監督）

千葉県の場合

手島　光

四年位前まで千葉県のハンドボールはレベルも低く、チーム数も高校男女で五チームと少数でしたが昨年度の関東大会を協会及び他都県の御協力によって終了いたしました、その前後においてチーム数も増えまして現在では男女で十五チーム近くになって来ました。総合的なレベルとしては関東でもまだ低い方だと思います。なぜ選抜にしたかと言いますと千葉県の場合五年後に国体を開くので全体のレベルを少しでも上げられるのではないかと言う事も一つの意味でした、幸いにして今回の国体予選では関東の代表権を取り国体に出場出来たわけです。

編成は女子の優勝チーム、昭和学院を主体にしたチームですが昭和学院は今年一、二年を主体にした若い穴の多いチームでしたので他の学校より四名選抜で補強したわけです。編成はインターハイ、関東大会と終了した時から行いました、練習量ですが土曜日、二時間位、日曜日は午前中、コンビネーション。午後、試合型式でした。選抜は試合に出場するまでにこまかい問題がありましたが、千葉県の場合、私は今回の選抜利用は成績から見ても良かったと思って居ります。試合をふり返ってみますとチームプレーに雑な所が出やすい準決勝の対静岡戦などに良く出て居りました、今後の国体も選抜で行くかどうかまだわかりませんが来年度も選抜になりましたらこれらを良い経験にして少しでも県のレベル向上するような方法でやって行きたいと思って居ります。

未熟な私がこの様な手記を記くのは心苦しいのですが、今後も私なりに努力して行きたいと思いますので御指導御願いいたします。（千葉選抜・昭和学院ハンドボール部監督）

福井県の場合

西島喜代治

一、チーム編成

チーム編成は六月下旬予選会の直後に高体連、協会の各関係者により合議の上、決定した。

二、高志高がインターハイ出場のため、選抜チームとしての本格的な練習は八月四日から始められた。練習は夏休み中の平日は午前中、九月になってからは午後四時から七時迄が原則として練習時間にあてられた。その間、一般女子チームともよく合同練習を行なった。八月中には四日市の田村紡に四日間合宿、また招待試合として対戦したチームには、秋田和洋、京都精華、小松市立女、静岡選抜、大阪スターズ等がある。この他、福井市内での強化合宿に約十日間がある。

練習法は八月の前半は主として基礎づくりに中心をおくと同時にチームとしてのコンビづくりに重点をおいた。このあと次第に実戦的練習に変えていった。即ち、試合経験が極めて浅いのでできるだけ練習試合、招待試合等をふやした。またコンビづくりには細かい所まで気を配り練習中は全員がキャプテン、正選手、マネージャーとしての言動をとらせるほか、宿舎にあっても部屋の割り当ては学校差をなくし、三年と二年とで区別して混成チームづくりに苦労した。練習にあたっては、技術的な面よりもむしろ高校生に望まれるものは精神的な面にあるとして、精神力の養成にも力を入れた。

三、選抜にふみきった理由

一応、単独で出場できるチームは県内では若狭チームぐらいしかないが、このチームは準決勝で福井商に敗れた。残った決勝チームの高志高と福井商はともに単独チームとしては、余りにも故障者が多くまたメンバー不足をきたしていたので混成にふみきらざるを得なかった。幸い同じ市内でもあり二校という最小限度の混成チームにできた。

四、今後の課題

必要と考えられる条件

一、地理的に近距離の選手が集まること。

二、学校環境の差が小さいこと
　進学校と実業高では困難を感ずる。

三、従来の練習法がチームにより余り差がないこと。

四、最も適した監督、コーチの存在。

五、チーム編成は早期におこないかなりの練習時間を積む。

六、混成になってもリーダー格の選手を含ませる。

大体　以上の条件が備わればかなり戦力が増すものと思われるが反面には。

一、混成なるがためにどうしてもチームの為に、また自分の学校の名誉にかけてもといった気力がやや欠ける。

二、よほどしっかりしたリーダーがいてチームの推進者がいない限り何となくまとまりがなくなる。

結論

個人の戦力の総和がチームの戦力とならないところに高校チームの課題がある。即ちチーム全体の精神力を忘れてはならない。この点で私は矢張り個人技はやや劣っていても選抜は避け単独チームの長期練習による強化をはかるのが最善と考える。（福井協会理事長）

北海道(男)の場合

松田徳之助

他県（協会）同よう、北海県の場合も、これまでどおり単独校で出場するか、あるいは選抜チームにするかについて3月下旬に開いた道協会総会でも出席者の間に、賛否両論が分かれた。

もしも、選抜にした場合、数校以上の混成チームでもよいことを承認されたが、この問題については関係者の間で、いろいろな見方、考えなどがあり話題となっ

た。北海道は、単独チームで出場するか、あるいは、選抜チームにするかについて、三月下旬、北海道ハンドボール協会総会でとりあげ出席者中でも賛否の両論があった。もしも、選抜にした場合、他の府県と違って地域が広く、チームが分散しているので十分なる練習ができないのではないか、選手強化する場合の費用がどのようにして捻出するか、それよりも単独チームの方が練習も思うようにできるのではないか、選手を何校から何人選抜するか、監督、コーチはどのようにして決めたらよいか、その他数々の意見がだされ、選抜か、単独かについてだけの時間はなんと、七時間にわたり活発な論議がなされた。始めてのケースでもあり当然のことでもあった。

結局、北海道は選抜チームで出場することを決定。その理由としては次のようなことである。

(一)底辺の拡大である。(多数のチームの中から選手を選抜し、他のチームの技術向上をねらえとする)

(二)北海道の現在の力では、単独チームは、他の府県チームとにまだ大きな力の差がある。

(三)好成績をあげることによって、道体体協より、選手強化費が多く援助される。

選抜方法としては。

(一)選抜委員会を作る。

(二)男女とも、全国高校選手権大会北海道予選（六月下旬）のときに十五名を優秀選手として選ぶ、更に六名を道国体予選で選抜し、計二十一名を選抜候補者として上げ、八月上旬全員合宿練習に参加させ十五名を選抜し、全国大会に出場させる。

(三)合宿練習期間としては、一週間函館市で行う、以上が三月の総会で決定された。

その後、七月下旬に更に、会議がもたれ、選抜方法について最終的な検討を加えられ結果的は次のように意見がまとまった。

道国体予選で優勝したチームの者が監督となり、そのチームの中から七名優先的に監督が推せんする。八名を他のチームより補強することが再度話しあいで決定した。関係者もはじめてのこころみのためいくたの不安もあったが全員お互に、協力して、たくましいチームを作ることで再出発した。

選抜委員長が十六名の選手を次々と発表した、選抜選手は、函館室蘭、札幌、北見絞別、稚内と広範囲であった。八月九・十日、北海道国体予選大会を行い、八月十一日より、一週間選抜選手の強化合宿を行った。費用の関係もあって、一週間と限定されていた。

私だけでは、短期間中、十分なる成果を上げることができないこと、また多数の方々の御意見を聞きいっしょに指導した方がよいのではないかと思い、夏休み中でもあったが、他校の監督の方々にコーチを依頼したところ、心よく引受けて戴くことができた。防禦、攻撃・ゴールキーパ各々一名のコーチが専門的に指導することにした。四名で詳細に計画し、一日の練習日程は、八時間、夜、一時間ミーテングを必ず持つことなどであった。国体予選後、直に、合宿練習に入ったために選手も少々バテ気味でもあった。北海道という特殊事情のため二回の合宿練習は出来ないのでそうとう選手に負担がかかった。二年生が半数以上のため、チームが若く、積極的でなく常に誰かをたよろうという動作が目立った。その点、コーチと選手が一体となって、選手が理解するまで話し合がもたれた。日増に心配された欠点も解消され、選手も最後までよく努力し、まずまずの成果を上げることができた。

合宿練習終了後、各コーチより詳細にわたり、個人の諸注意、欠点、今後の自主トレーニングにつき話され解散した。九月二十五日函館に集合し、三日間練習が行なわれたが、三十七日間という大きなブランクのため残念ながら、また個人技術だけにたより過ぎ、合宿練習前に逆もどりであった。前に申したように北海道のチームが広い範囲に分散しているために合同練習ができないことが大きな悩みである。函館から稚内まで急行列車で十六時間、(他の府県内ではせいぜい三時間程度の事でしょう)、北海道は特殊な環境であるため仕方があるまい。

今後における北海道選抜の問題点としては次のよう事が考えてゆかなければならないと思います。

先ず、底辺の拡大である。現在、北海道では高校女子チームが十七校ありますがもっとチームを多くし、将来五十チーム位までふやすことを目標として考えておりますが、そのような状態になったときには、北海道ハンドボールのレベルも向上し、他の府県のチームと肩を並べることができるでしよう。更に道ハンドボール協会としても今後資金の確保を考えなければならないだろう、今年も費用がないために、選手自身に経済的にも精神的にも大きな負担がかかり過ぎた感もあった。

函館市での合宿練習後、一回も合同練習を持つことができなかった。練習も数多くできればもっとチームにまとまりがついたのではないかと反省しております。

今後北海道は、チーム数が増加することによって、地区別のチーム選抜で国体予選を考えるべきだと思います。今年の選抜を参考にして本年度は、よりよい選抜方法を考えるとともに、北海道ハンドボールが発展するよう皆様方のあ

たたかい御支援と御指導をお願い致します。（全北海道監督北海道協会常務理事）

北海道(女)の場合

小川 貫博

初めての試みでもあり、道協会の内部にも色々問題があり、今年の結果を十分反省して、次回には何とか強力なチームを編成したいというのが我々の一致した心境である。

選抜チーム編成は、北海道予選大会（於函館）優勝チームより七名、他チームより八名選出し、大会終了後直ちに一週間合宿して、選手の特徴を把握し、チームワーク養成につとめた。今年度当初の予定では、インターハイ道予選で一五名、国体道予選で六名の計二一名選出して合宿後一一〜一五名にしぼってチーム編成しようという意向であった。しかし、予選形式をとること、又チームゲームであることなど、チームに目標の選抜形式をとることとなった。

選抜された選手は函館八名、室蘭五名、紋別二名の計一五名である。地理的に非常に離れているために合同練習は全く不可能であることから大会終了後一週間合宿した。しかし、チームをまとめるまでにはいたらず、各自に練習課題を与えて解散することとなった。したがって出発するまでの一ヶ月は一度も合同練習をしなかった。二〜三日早めに出発して清水市で三日間合宿し、ややまとまりをみたところで現地入りをした。高浜町で仕上げをしようと計画していたのですが雨のため十分練習できないまま大会に望みました。せっかくすぐれた選手を集めながら、十分な仕上がりをみずに参加しなければならなかった点を反省して、長期的に各自のすぐれた技術をまとめなければ、好結果は期待できないと思われる。

選抜の目的は勝つことである。勿論出場選手の経験を各チームに還元して底辺の強化をはかるという目標もあるが、しかし、最近数年は、一回戦で敗退しているので何とか勝ちたいことから計画されたものである。北海道は広大なうえに、チーム数が少なく、対外試合にもめぐまれず、他府県に比べてレベルが低い。したがって、選抜のゆるされた本大会より、すぐれた選手を集め、強化してみようということでふみきった次第である。

今大会の反省会をもっていないので、全体の意向はお知らせできないが、私見をまとめてみたいと思います。

一、早い時期に選抜選手を決定すること。

各校ともにインターハイを目標に練習しているので、インターハイが終れば三年生は、受験準備、その他の都合で国体予選には出場しないことが多い。特に普通高校ではこの傾向が強い。今年の場合も、インターハイで優秀選手に選ばれた三年生はほとんど参加していない。もし、インターハイ道予選で決定していたら、相当やれたと思う。

二、少くとも週一度は練習できる範囲で選抜すること。

いかにすぐれた選手を集めても合同練習しなければ、チーム力を発揮することはできない。したがって、一週間に一度は全員が集まって強化練習できる範囲で選抜チームを作り、このチームで予選を行い代表を決定する。即ち、全道を各ブロックに分けて、代表になった選手が十分練習できるという選抜条件が必要である。確かに全チームより選抜すれば、技量のある。大型チームはできるが、反面欠点をいかにしてカバーするかということになる。即席的選抜チームでは簡単にはいかない。

これらの問題を解決して、十分研究し、底辺の拡大を平行して、最強のチーム編成できるように努力したい。（全北海道・函館東高監督）

来年以降のインターハイ開催地

全国高体連では11月22日、東京で理事会を開き来年度以降の全国高校総合体育大会（インター・ハイスクール）の開催地について協議、次のように決定した。なお、昭和48年度は三重県に内定。

▽昭和44年、群馬県（ハンドボールは富岡市）▽45年和歌山県（ハンドボールは滋賀県下の予定）▽46年四国4県（ハンドボールは愛媛県下）▽47年山形県（ハンドボールは東根市の予定）

塩沢幹氏(協会顧問)に褒章

政府は11月15日の閣議で文化各分野の功労者に贈る紫、藍、黄綬褒章の受賞者71人を決めたが日本ハンドボール協会顧問塩沢幹氏（六一）＝日本体協事務局長＝は藍綬褒賞を授与された。

塩沢氏は昭和12年から13年にかけ日本ハンドボール協会の創設に努力され、日本協会設立委員、初代理事などをつとめられ戦後は協会参与、昭和40年からは顧問を引きうけられている。

▽訂正　本誌前号16頁〝ＩＨＦ総会に出席して〟の執筆者名を荒井清美としましたのは、荒川清美氏の誤りでした。

世界選抜チーム

チェコ選抜チームと対戦

世界八ケ国から選ばれた一八人が世界選抜を編成

コーチはクンスト氏（ルーマニア）・ケーニッヒ氏（チェコ）

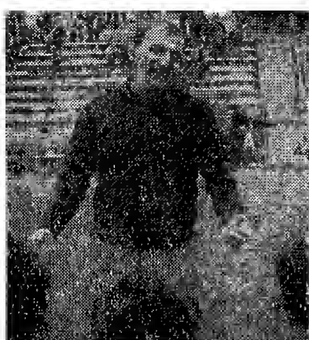
チェコスロバキアハンドボール協会では、同協会設立20周年を記念して、世界各国のトップ・プレーヤーからなる世界選抜チームと同国選抜チームの対戦を企画して8月にチェコスロバキアの古都カルビナで挙行した。

カルビナは非常にハンドボールの盛んな地方の中心であり、石炭の街、七百年の歴史を記念して、開かれた。

カルビナの街のグランドには、七千人の観衆がこの世紀の一戦を見ようと集った。

結果は前半のリードを守り、後半のチェコチームの追い上げを振りきった世界選抜チームが24－21の3点差で勝利を握った。

コーチには、ルーマニアのイオン・クンスト氏と、チェコのコーチであるベードリッヒ・ケーニッヒ氏の二人の現在世界最高のコーチがあたることとなり、コーチの彩配といった意味でも、大いに興味がもたれた。



クンスト氏



ケーニッヒ氏

世界選抜 24（13－6、11－15）21 チェコ選抜

得	〔チエコ選抜〕		〔世界選抜〕	得
0	パベルカ	GK	アルノスト（チエコ）	0
0	スカルバン	GK	トマジク（ユーゴー）	0
2	クリムシク	FP	グルイア（ルーマニア）	6
2	コネスニイ	FP	ヤコブ（ルーマニア）	2
1	ベリク	FP	ソロムコ（ソ連）	0
2	ホルバス	FP	クリモフ（ソ連）	1
5	グレノ	FP	リョーブキング（西独）	4
3	ラニク	FP	ムンク（西独）	2
1	キスマネス	FP	マロシ（ハンガリ）	2
1	ホドラバ	FP	コバクス（ハンガリ）	0
1	キネル	FP	フエンヨー（ハンガリ）	0
2	ベネス	FP	エリクソン（スウェーデン）	0
0	コンラウド	FP	ルンド（デンマー）	1
1	ジヤニク	FP	ブルナ（チェコ）	0
		FP	ハブリク（チェコ）	1
		FP	マレス（チェコ）	1
		FP	デュダ（チエコ）	2
		FP	ホルバス（ユーゴ）	2
21				24

6人の左腕選手が世界選抜に

世界から選抜されたチームだけに種々の選手が集められたが、各国のポイントゲッターがずらりと並んだのはまたは豪華だ。グルイア（ルーマニア）、ソロムコ、クリモフ（どちらもソ連）、リョーブキング（西ドイツ）、コバクス（ハンガリー）、エリクソン（スウェーデン）とずらり顔を並べている。

また左利きの選手を6人揃えたのも、一つの特色といえよう。ルーマニアのというより、世界のグルイア、チェコのブルナ、ハンガリーのフェンヨー、西ドイツの新星で得点王リョーブキングを追いかけているムンク、デンマークのルンドといった面々が顔をそろえている。

僅か二日の練習で呼吸はピタリ

世界の8ケ国から集った選手は試合の三日前にカルビナに合流し二日間の合宿を行ない、試合にそなえた。試合では、常に顔を合わせていても、同一チームで試合をしたことのない面々のコンビが果して、うまくいくかと心配されたが、そこは名だたる名コーチ、クンスト氏とケーニッヒ氏、僅か二日の練習の間に見事にチームをまとめあげた。たとえば、フリースローでも、ソロムコがトスをあげ、ブロックに入ったところをグルイアがシュートする。リョーブキングからホルバスへパスが行く、あるいは、ソロムコ、ルンドムンクがディフエンス・ラインに並ぶという光景も見られ、練習を見に集ったファンを、試合前にすでに魅了していた。

チエコ・チームは東ドイツが不参のため、最初予定していたより大勢の人数を世界選抜にさかなけ



後列左からコーチ・ケーニッヒ、デュダ、グルイア、ルンド、クリモフ、エリクソン、ホルバス、ブルナ、ハブリク、トマジク、コーチ・クンスト　前列左からソロムコ、マロシ、アルノスト、ムンク、リョーブキング、フエンヨー、コバクス、マレス、ヤコブ

ればならず、チェコ選抜には、前回の世界選手権に出た選手はごく少数になった。

チェコ選抜は今年度のチェコ選手権チームであるバニク・カルビナ、ベードリッヒ・ケーニッヒ氏に率いられ今年は優勝をカルビナにゆずったものの、強力メンバーを誇つているデュクラ・プラーグ今年三位のテトラン・プレソフなどから選ばれた選手で構成され、なかなかの強チームであった。

記念式はチェコ会長のフランテイセク・ボセック氏、カルビナ市当局の面々、あるいは各国協会の代表などが列席し、盛大に開かれた。

試合は予想通り、各国のゲッター連が次々と得点をあげ、それをチェコ選抜がボツボツと追いかけるという経過で前半がおわった。

二人のコーチは、最大限の得点と多くの選手を使うという点で、なかなか試合を運ぶのが困難であったが、シュートをすると交替するといった方法で選手交替を行ないながら、試合を進めていった。

後半に入ると、チェコ選抜はこの交替の間隔をぬつて、追い上げをはかったが、世界選抜チームは名うての巧者揃い、着々と得点を重ね、追いすがるチェコ選抜をつきはなした。

各国の選手はそれぞれ、自己のもてる力をフルに発揮した。ソ連のソロムコはポストプレーヤーとしての真面目を、スウェーデンのエリクリン自己のもてる能力を発揮し、アシストの実を示すことで得点のなさをカバーした。

チェコ選抜が善戦したのは、一つには、強力な攻撃陣を相手にしたディフエンスラインの活躍があげられるが、それよりも、カルビナのキーパー、パベルカと、それに代ったデュクラのキーパー、スカルバンの活躍があげられよう。

とにかく、世界ではじめて、世界選抜チームが編成され、短時日の練習ではあったが、合同練習をしたことは、各国の技術の交流、選手間の親睦といった意味できわめて有効であったとされている。

ここで問題なのは、ハンドボールにはプロがいないことである。現にここに集ったのも、学生あり教師あり、技術者であり、事務員ありといったマチマチの職業のものであり、それぞれの勤務の合い間をぬい、カルビナに集ってきたものである。

プロでない、アマチュアのスポーツであるハンドボールだけに、こういつた形の選抜チーム作りには、多くの困難が伴なうが、今回の集りが非常に好評であっただけに、今後ともこういった形の試合形式が、各国でとられることが望まれ、多くのファンに世界超一流のプレーヤーのプレーが見られるようになることが望まれている。

参加した世界選抜の選手諸氏にはチェコ名産の一つである。チェコグラスによって作られたコニヤックグラスが記念品として、配られた。

この試合を観戦していた記者団の中から、ハンドボールのハーレム・グローブ・トロッターズとの言葉が出たが、正にその感が深かった。

このような形の試合がくりかえし、行なわれるようにの希望が観衆の中にも湧きおこっていた。

一年に一度でいいから、このような催しが行なわれるように、それが伝統の中で定着していくように各国協会が努力していくように望まれている。

日本でも、より小規模でもいいから、この種の催しが企画され、各国の超一流の選手が一堂に会して、その超一流のプレーが日本のファンの眼の前で展開されることを夢見つつ、筆をおこう。

★☆★☆★☆★☆★

海外トピックス

藤本　強

西ドイツ11人制はＴＶクレフエルトオップムに

ヨーロッパ諸国、特に西ドイツに於いて、11人制ハンドボールの人気が一こうに衰えないのは、本誌でも、しばしば触れてきたところであるが、今年も西ドイツの国内リーグが4月～9月にかけておこなわれた。この国内リーグは南北リーグに分れ、それぞれのリーグは10チームからなっている。

もちろんこの国内リーグは西ドイツの最高のものであり、この下に各地方、あるいは各都市におけるリーグがあるには周知のとおりである。

この国内リーグは南北にわかれ、このそれぞれのリーグの覇者によって、ドイツ選手権が争われるのは冬季に於ける7人制選手権の場合と同様である。

今年も11人制ドイツ選手権をかけて、ＳＧ・ロイターハウゼンとＴＶ・クレフエトオツプムの間で争われた。

ＳＧ・ロイターハウゼンは今冬常勝ＶＦＬ・グンメルスバッハを破り、7人制ハンドボールの選手権者になったチーム、ここに二冠がなるか、あるいは11人制においては絶対に強いといわれていたＧＷダンケルセンを北リーグで敗って、この試合に出てきたＴＶ・クレフェルトオップムが選手権を握るかに興味がもたれた。

この一戦を見るようとデュッセルドルフのライン・スタジアムに集った観衆は二萬人、正にスタンドを埋めつくしているといってもよい程の観衆が集っている。

試合はとりつ、とられつのシーソゲームを展開したが、接戦の末コーチ、ハンス、カイタに率いられたＴＶ・クレフエルトオップムが優勝した。

これによって、女子のＦＣ・ニユールンベルクがごく最近になしとげた二冠の夢を再び果そうとしてＳＧ・ロイターハウゼンの野望は崩された。ここ数年毎年、チャンピオンチームが変っているのは、充実をものがたっているのであろう。

国際試合の観衆の数をＩＨＦに報告する

ＩＨＦでは、この度、国際審判員ならびに各国協会にあてて、従来国際試合を行ったら、義務としてＩＨＦに報告することになっていたスコアーに加えて、必ずその試合を見に集った観衆の数を報告するように要請してきた。

これはハンドボール人口とどこの国でハンドボールがどういう状況にあるかをＩＨＦが確実につかんでおこうと意図からでたものである。

馬場副会長の欧州だより①

若さ誇る西ドイツ2軍

渡欧中の日本協会馬場太郎副会長から編集部あて欧州球界の近況を伝える第1信が届いたので御紹介しよう。

いよいよヨーロッパの本格的なシーズン（室内）が幕をあけ、各地で早くも国際試合が行われている。

私はいまケルン大学（西ドイツ）にいるので、西ドイツ球界との接触が多く、特に旧知のヴェルナー・ビック氏の案内で、試合やら練習施設などを見聞している。

ビック氏は、昭和31年に来日した西ドイツ選抜軍のコーチで御記憶の方も多いハズ。現在はケルン体育大学教官で、その指導手腕を高く買われ、ナショナルチームのトレーナー（日本でいうところの監督、コーチ）をつとめており、ビック氏の助手の一人に昨年来日したＧＫのデュエル君がいる。

さて、4年後にせまった地元でのオリンピックに備えて西ドイツハンドボール界の意気は、まことに盛んなものがあり、男子ナショナルチームの本拠地における1月までの国際試合の日程は、対7ケ国9試合と発表されている。

このうち、12月にはルーマニア1月にはチェコが来征の予定で今からファンや関係者の話題にあがっており、一方、女子はルーマニア遠征のあと、12月6日から3日間ユーゴ、チェコとによる「3国リーグ」がユーゴーで開かれる予定だ。

男子ナショナルチームの今季第1戦は、10月27日ベルギーのデンデルモンデ市に遠征して行われ、私も同行したが

西ドイツ　29（13―9、16―6）15　ベルギー

のスコア。

遠征メンバーは19才～22才までのいわばナショナル2軍だったがさすがに伝統と1軍ゆずりの流れいなパスワークを見せ、しかもスピード豊かな脚力から得意の「8の字戦法」で相手のマークをはずし、どぎもをぬくような強烈なシュートを浴びせていた。

特にサウスポーのエプレ（身長一八四、体重七二、球歴十年、21才）、ブハー（一七八、七五、十年、21才）ゲッツア（一八八、八〇、十年、22才）の3人の快技巧技は本場のハンドボールのよさをいやというほど見せつけた。

一方、ベルギーは長身のワインとバン・デ・ベルタの二人を軸に食いさがったが、平均身長一八二・六、体重七二という若さとスタミナを誇る西ドイツに最後まで主導権を握られてしまった。

快勝した〝若い西ドイツ〟は、一昨年の来日チームはもとより、一昨年スェーデンの世界選手権で日本と顔をあわせた西ドイツよりもはるかにスケールの大きい、手ごたえのあるチームと私は見てとった。

4年後のオンリピックまでに、この若者たちがすくすくと成長したなら、西ドイツはやはり、ハンドボールの祖国にふさわしい成果をあげることが出来るだろう。

立教〝最後の王座〟獲得（3連勝）

善戦の関西大を振り切る

全日本学生王座終会す

東西各学連秋の優勝校による予選を勝ち抜いた東日本代表立教大（関東）と西日本代表関西大（関西）の雌雄を決する第21回全日本学生王座決定戦は、12月1日午後3時から大阪市立中央体育館に約二千の観衆を集めて行われた。

昭和23年に始められたこの大会は、全日本学連の決定で、今年をもってその21年にわたる球史を閉じることとなり、昨年と同じ顔合せとなった両校は、感がいをこめての激突を演じたが、総合力にまさる立教大が、追いすがる関西大を振り切って3年連続優勝を飾るとともに〝最後の王座〟を掌中にした。

なお、王座の獲得は関東学連が13回（芝浦工大8、立教3、日体大・東京教大＝文理大＝各1）、関西学連が8回（いずれも関学）となった。

立教 27（15－6, 12－11）17 関大

得	【立教】		【関大】	得
0	川口	GK	西口	0
0	天野	GK	入江	0
6	野田	FP	馬着	4
6	東	FP	長野	5
5	小野口	FP	西脇	2
5	戸田	FP	松田	2
0	倉前	FP	宮永	1
3	加藤	FP	許	3
0	古谷	（主審 村田）	飼沼	0
2	有永		宮松	0
0	原本		伊藤	0
27	（1）	7MT	（1）	17

1分30秒速攻から戸田のゲットに始まり、2分30秒同じく速攻から野田が右サイドから、3分20秒、加藤が入りこみ、中央からのポストプレー、つづいて速攻から東と6分をすぎる頃には、4－0とリードして、完全に関大を自己のペースに引きこんだ。一方関大は、立教のディフェンスを攻めあぐみ、シュートをうっても、バックに片側をつぶされているため、キーパーに完全にとめられ、僅かに2点を返したところで、15分を迎えた。

この間、立教はポストに入れるパスにミスがかなり見られたが、着々と加点し、20分には9－2、そのままの経過で続いたが、終了間際に立教のミスを得点に結びつけた関大の反撃も2点に押えられ、15－6の9点差で前半終了。

後半も立教ペースで試合が進み時折見せる関大の反撃も着々と加点していく立教の前に点差は時間とともに拡がった。

後半15分には、野田、東をベンチに休ませるという余裕を見せ、新メンバーで対戦し、関大もこの機をとらえて反撃したが、パスミス、シュートミスがあり、点差を決定的につめるまでには至らなかった。

主力陣をベンチに入れたとはいえ、後半20分頃から見られた立教のパスミスはいただけない。またこれを同じようにミスをして、得点に結びつけることができなかった関大も不甲斐なかった。結局、実力差はいかんともすることができず、関大は立大の軍門に降ったのであるが、内容的に見て、最後の王座を争うにしては一寸寂しかった。勝負は戦前からかなりはっきりしていると思われていた試合だけに、最高のプレーを見せあって欲しかった。それが昨年同様の内容になったのは、最後の大会だけに一層残念だった。（藤本）

全日本学生王座決定戦 21年間の記録

◇第1回（昭23.12.19・西宮）
文理大 5（2—1, 3—3）4 関学

◇第2回（昭24.12.18・駒沢）
関学 5（3—3, 2—1）4 日体

◇第3回（昭25.12.10・西宮）
関学 5（2—2, 1—1, ……, 1—0, 1—0）3 早稲田

◇第4回（昭26.11.25・駒沢）
関学 8（5—4, 3—3）7 立教

◇第5回（昭27.12.14・西宮）
関学 9（4—3, 5—4）7 日体

◇第6回（28.11.30・神宮）
関学 13（6—5, 7—6）11 早稲田

◇第7回（昭29.12.4・西宮）
関学 9（5—1, 4—5）5 日体

◇第8回（昭30.11.26・神宮）
日体 10（4—4, 6—5）9 関学

◇第9回（昭31.12.22・西宮）
芝浦工大 9（5—5, 4—3）8 関学

◇第10回（昭32.12.15・後楽園競輪場）
芝浦工大 21（10—5, 11—6）11 関学

◇第11回（昭33.11.30・西宮）
関学 12（5—4, 7—6）10 芝浦工大

◇第12回（昭34.11.29・国立）
芝浦工大 24（13—6, 11—11）17 関学

◇第13回（昭35.11.23・西宮）
関学 12（8—4, 4—7）11 芝浦工大

◇第14回（昭36.11.23・小石川球技場）
芝浦工大 18（10—6, 8—7）13 同志社

◇第15回（昭37.11.23・西宮）
芝浦工大 19（10—4, 9—4）8 同志社

～以上11人制～

◇第16回（昭38.11.23・新宿体育館）
芝浦工大 25（11—4, 14—13）17 同志社

◇第17回（昭39.12.6・大阪府立体）
芝浦工大 24（10—5, 14—7）12 同志社

◇第18回（昭40.11.23・駒沢体育館）
芝浦工大 27（18—9, 9—9）18 同志社

◇第19回（昭41.12.3・大阪府立体）
立教 28（13—3, 15—7）10 同志社

◇第20回（昭42.11.23・駒沢体育館）
立教 22（13—3, 9—7）10 関西大

◇第21回（昭43.12.1・大阪中央体）
立教 27（15—6, 12—11）17 関西大

立教、日体大に春の雪じょく　関東

～秋の学生リーグ戦終わる～

東海は中京大　関西大、決定戦で同志社を破る

秋の学生リーグ戦は、全国各地区の学連で、全日本学生王座をめざし熱のこもった試合を展開した。

その結果、激戦地区の関東では立教と日体大が全勝同士で対決立教が春季の雪じょくはたし、一方、関西では同志社と関大が引き分け同率となり9年ぶりで優勝決定戦が行われ関西大が勝った。このほか、東北北海道は東北学院大、北信越は富山大、東海は中京大、中四国は岡山大が地力を示して優勝を決めた。

女子は関東が日体大、東海が中京大と今シーズンも常勝校がゆるがなかった。日体大女子が昭和36年秋以来つづけている対学生連勝記録は「74」に伸びた。なお、関西でも女子が発足した。

東北・北海道

第13回東北・北海道学生選手権（東北・北海道学連秋季大会）は11月9、10の両日青森県の弘前大球技場に7大学が参加して行われた。

予選試合で勝ち残った3校と前季優勝の東北大による決勝リーグでは連勝を狙う東北大と、復調なった東北学院大が引き分けとなりともに2勝1分の成績を残し、得失点差で東北学院大の首位が決まった。

東北学院大の優勝は第11回大会以来2年ぶり9度目、学連大会では3シーズンぶりである。

▽予選ラウンド（勝者が決勝リーグ、敗者は5～7位決定リーグへ）

東北学院 41（25－8，16－5）13 山形大

岩手大 22（13－11，9－10）21 仙台大

▽決勝リーグ

北海道大 27（16－10，11－6）16 弘前大

東北大 27（17－7，10－13）20 北海道大

東北学院 24（12－11，12－5）16 岩手大

東北大 33（16－8，17－11）19 岩手大

東北学院 40（21－7，19－6）13 北海道大

岩手大 20（12－7，8－9）16 北海道大

東北学院 12（5－5，7－7）12 東北大　引き分け

【順位】①東北学院大2勝1分（得76、失41）②東北大2勝1分（得62失51）③岩手大1勝2敗④北大4敗

▽5～7位決定リーグ

山形大 30（18－11，12－6）17 弘前大

仙台大 39（19－10，20－4）14 山形大

仙台大 35（16－8，19－5）13 弘前大

【順位】⑤仙台大⑥山形大⑦弘前大

激しかった優勝争い　4校無敗で後半へ

関東

男子1、2部、女子は11月1日から13日まで駒沢屋内球技場で初めて全日程を〝室内〟で進めた。

男子1部（8校）は、立教、日体大、中央、早稲田が全勝で後半戦を迎えるというかってない激戦を展開したが、結局最終試合で立教と日体大が6戦全勝で激突、立教の攻守が日体大を上廻り2シーズンぶり10度目の優勝をとげた。

2部（7校）は日大が2シーズンぶり2度目の優勝。各校コートで行われた3部（7校）は東大、4部（9校）は上智大がそれぞれ初優勝した（いずれも全勝）。

女子（5校）は常勝日体大が東京女体大に激しく追いあげられたが辛くも勝ち15シーズン連続19度目の優勝を決めた。

なお、今シーズンから男子1部と女子優勝校に毎日新聞社杯が贈られることになった。

▽男子1部

【明治】	得		【立教】	得
田中	0	GK	川口	0
藤森	0		天野	0
田辺	1	FP	野田	3
鈴木	3		東	2
兼子	1		小野口	3
藤井	5		戸田	2
野村	1		倉前	1
鈴下	7		加藤	2
住田	0		古谷	0
浦野	0		有永	6
末田	0		原本	0
18		7MT（4）（主審 田中）		19

中央 20（9－10，11－7）17 法政

早稲田 21（10－8，11－12）20 芝浦工大

中央 20（11－10，9－5）15 芝浦工大

【芝浦】	得		【中央】	得
杉山	0	GK	望月	0
高橋	0		井上	0
新実	1	FP	喜田	2
秦	2		植木	3
村上	2		森山	6
白神	0		児玉	2
高鍬	1		堀切	3
大矢	4		佐野	4
明石	3		長広	0
大江	2		植田	0
森	0		佐藤	0
15	（2）	7MT（主審 大塚）	（0）	20

早稲田 19（14－8，5－4）12 法政

日体大 30（20－1，10－4）5 明治

立教 30（17－7，13－5）12 東京教大

日体大 18（9－8，9－7）15 法政

日体大 14（9－7，5－5）12 東京教大

立教 19（9－5，10－13）18 明治

得	【日体】		【法政】	得
0	本田	GK	金	0
		GK	和田	0
2	早川	FP	大山	3
7	高橋	FP	石井	2
1	森	FP	川島	3
1	井上	FP	五十嵐	0
2	藤中	FP	出口	0
2	谷藤	FP	武井	2
0	塩崎	FP	大島	2
3	斎藤	FP	西村	2
0	大川	FP	荒井	1
18	(0)	7MT	(4)	15

早稲田 23 (15―5 / 8―5) 10 明治

立教 13 (8―6 / 5―3) 9 芝浦工大

中央 10 (3―7 / 7―3) 10 東京教大

引き分け

立教 22 (13―9 / 9―9) 18 法政

中央 26 (13―10 / 13―2) 12 明治

早稲田 17 (12―8 / 5―8) 16 東京教大

日体大 12 (7―4 / 5―6) 10 芝浦工大

立教 23 (10―8 / 13―6) 14 中央

日体大 14 (3―8 / 11―4) 12 早稲田

得	【日体】		【早大】	得
0	本田	GK	綿貫	0
0	大村	GK	山本	0
2	早川	FP	萩原	1
0	高橋	FP	森田	3
0	森	FP	鈴木幸	2
3	井上	FP	鈴木博	3
2	藤中	FP	尾島	2
3	谷藤	FP	杉山	1
3	塩崎	FP	大竹	0
0	大川	FP	斎藤	0
1	斎藤	FP	島田	0
14	(3)	7MT	(0)	12

芝浦工大 19 (12―5 / 7―6) 11 東京教大

法政 17 (13―1 / 4―5) 6 明治

芝浦工大 21 (13―5 / 8―5) 10 明治

日体大 18 (11―4 / 7―4) 8 中央

東京教大 18 (9―8 / 9―8) 16 法政

得	【教大】		【法政】	得
0	上野	GK	金	0
0	仲尾	GK	和田	0
4	畑	FP	大山	2
3	稲垣	FP	石井	2
6	平岡	FP	川島	6
2	高橋	FP	五十嵐	0
0	斎藤	FP	田中	1
1	水藤	FP	武井	1
0	梁川	FP	大島	0
1	森	FP	西村	1
1	久下	FP	荒井	3
18	(0)	7MT	(0)	16

(主審 近藤)

立教 25 (14―8 / 11―8) 16 早稲田

得	【立教】		【早大】	得
0	川口	GK	綿貫	0
		GK	山本	0
5	野田	FP	荻原	3
1	東	FP	森田	1
5	小野口	FP	鈴木幸	3
6	戸田	FP	鈴木博	5
0	倉前	FP	尾島	3
1	加藤	FP	杉山	1
0	古谷	FP	大竹	0
7	有永	FP	斎藤	0
0	原本	FP	武藤	0
25	(2)	7MT	(1)	16

(主審 藤原)

明治 19 (9―3 / 10―3) 6 東京教大

法政 16 (12―6 / 4―9) 15 芝浦工大

中央 19 (13―5 / 6―11) 16 早稲田

得	【中央】		【早大】	得
0	望月	GK	綿貫	0
		GK	山本	0
0	喜田	FP	荻原	4
4	植木	FP	森田	2
2	森山	FP	鈴木幸	3
0	児玉	FP	鈴木博	3
3	堀切	FP	尾島	1
3	佐野	FP	杉山	3
0	長広	FP	大竹	0
7	植田	FP	斎藤	0
0	佐藤	FP	武藤	0
19	(0)	7MT	(0)	16

(主審 藤原)

立教 15 (9―4 / 6―4) 8 日体大

得	【立教】		【日体】	得
0	川口	GK	本田	0
3	野田	FP	早川	1
6	東	FP	高橋	1
2	小野口	FP	森	0
1	戸田	FP	井上	2
1	加藤	FP	藤中	0
2	有永	FP	谷藤	2
0	倉前	FP	塩崎	1
0	古谷	FP	斎藤	1
0	原本	FP		
15	(0)	7MT	(2)	8

(主審 中沢)

関東学生秋季リーグ（1部）

	立	日	中	早	芝	法	教	明	勝	負	分
①立教	×	○	○	○	○	○	○	○	7	0	0
②日体	●	×	○	○	○	○	○	○	6	1	0
③中央	●	●	×	○	○	○	△	○	4	2	1
④早稲田	●	●	●	×	○	○	○	○	4	3	0
⑤芝浦	●	●	●	●	×	●	○	○	2	5	0
⑥法政	●	●	●	●	○	×	●	○	2	5	0
⑦東教	●	●	△	●	●	○	×	●	1	5	1
⑧明治	●	●	●	●	●	●	○	×	1	7	0

【2部】①日大6戦全勝②慶応5勝1敗③国士館3勝2敗1分④明星3勝3敗⑤防衛大2勝4敗⑥順天堂1勝4敗1分⑦武蔵工大6敗

【後記】秋季リーグは兼々県案とされていた室内問題をおもいきって実施に踏切ってみた体育館の使用スケジュールの関係上全部の実施は不可能で、取敢えず今リーグは一部、二部、女子のみとし三四部は今迄通りオープンで実施する事とした。体育館の使用規定時間ぎりぎり朝九時の早朝試合から夜九時の終了の試合と目まぐるしい日程で各チーム特に五時以降行われる一部の選手達はコンディションの調整に苦労したものと思われ試合前のウォーミングアップも充分でない状態で試合に臨まなければならないようであったのが難点でその他の条件等は好評で特にウイークディの試合にもOB連が見られると云うので春秋共室内賛成論者がめっきり多かった。今季リーグから毎日新聞社の御協力で毎日杯争奪秋季大会と名称も新たになり第一回の毎日杯をかけての熱戦がくりひろげられた。

春季リーグ夏のインカレと破竹の進撃を続ける日体大はベテラン早川を中心に春秋連続制覇をもくして熱のあるゲームを展開健斗はしたものの立教得意のセットオフエンスの前に屈する結果となった。立教はテクニシャンの野田・東のうまみのあるリードに新人ながら長身の有永がリーチを生かした巧みなシュートをみせ各大学伏兵にしてやられたと云う感が強く有永の成長が特に目立った。中央は森山・喜田・植木・の長身コンビが良く走り前半順調な滑り出しをみせたが教大と引分けてから立教、日体と二敗を喫し優勝圏内から脱落した。最終戦対早大の逆転勝ちを見せ、そのチームワーク振りは賞賛される。今一段の精神面の充実が望ませる。早大、芝浦は実力を出しきれず不振に終ったのが悔まれるが来年期待される要素が充分ある。（田中秀夫・関東学連理事長）

日大、慶応降し優勝

▽男子2部

慶応 23―18 防衛大
明星 30―7 武蔵工大
国士館 16(分)16 順天堂
日大 23―15 順天堂
明星 21―10 防衛大
慶応 26―18 武蔵工大
日大 25―13 武蔵工大
慶応 28―18 順天堂
国士館 21―17 防衛大
明星 19―17 順天堂
国士館 27―13 武蔵工大
日大 28―9 防衛大
国士館 14―13 明星
日大 16―11 慶応
防衛大 21―4 武蔵工大
慶応 31―19 国士館
防衛大 22―12 順天堂
日大 23―11 明星
順天堂 24―11 武蔵工大
日大 25―20 国士館
慶応 24―12 明星

【後記】優勝をかけた日大―慶応戦はともに小さなミスが目立ち得点機を自からつぶすという内容の乏しい試合だった。

この両校と他の5校との間にも〝差〟が生じているのだから全般のレベルが判ろうというものだ。

スピードのなさは以前から指摘されているが、プレーに正確さがないのも各校共通の欠点である。

せっかく一部と同時に日程を運行しているのだ。せめて上位の実力は一部の下位と比肩できるぐらいであって欲しい。

明かるい材料もあるにはある。個人技をうまくチームプレーに活かそうと努力していることだ。

個々の選手では元田、田中（日大）、古村(慶応)、川添(国士館)、河住(順天堂)、清水(明星)、GKでは吉田（日大）がずば抜けている。（杉山茂・NHK）

▽1・2部入れ替え戦（11月23日駒沢体育館）

明治（1部）22（10－9、12－7）16 日大（2部）

明治大は1部残留

奮起の東大、全勝優勝

▽同3部

関東学院大 14－13 東京学芸大
東京理科大 12－8 千葉工大
東大 33－11 明治学院大
関東学院大 20－15 東京理科大
東京学芸大 22－12 千葉工大
茨城大 15－14 明治学院大
東大 22－5 千葉工大
茨城大 15－13 関東学院大
明治学院 20－13 東京理科大
関東学院大 22－13 明治学院大
東京学芸大 24－12 東京理科大
東大 17－8 茨城大
茨城大 15－13 関東学院大
東大 22－5 千葉工大
明治学院大 20－13 東京理科大
千葉工大 11（分）11 関東学院大
茨城大 14－11 東京理科大
東大 22－10 東京学芸大
東京学芸大 29－14 明治学院大
東大 18－12 関東学院大
茨城大 18－10 千葉工大

【順位】①東大6戦全勝＝来シーズンから2部へ復帰②東京学芸大5勝2敗（得118、失86）③茨城大5勝2敗（得83、失85）④関東学院大3勝2敗1分⑤明治学院大2勝4敗⑥東京理科大1勝5敗⑦千薬工大5敗1分

上智大が優勝飾る

▽同4部

上智大 31－5 青山学院大
横浜商大 34－12 独協学園大
千葉商大 24－12 都立大
山梨大 21－12 東京農工大
横浜商大 20－15 青山学院大
千葉商大 27－16 東海大
上智大 24－22 独協学園大
上智大 21－9 都立大
横浜商大 22－12 東京農工大
青山学院大 23－22 東海大
山梨大 23－19 独協学園大
都立大 23－8 東京農工大
上智大 30－8 東京農工大
都立大 18－12 青山学院大
山梨大 24－14 東海大
千葉商大 12－8 独協学園大
千葉商大 32－6 東京農工大
都立大 18－11 横浜商大
山梨大 22－13 青山学院大
独協学園大 21－16 東海大
上智大 24－13 東海大
都立大 19－11 山梨大
青山学院大 20－10 東京農工大
横浜商大 18（分）18 千葉商大
千葉商大 40－7 青山学院大
独協学園大 24－12 東京農工大
横浜商大 29－16 東海大
上智大 18－9 山梨大
都立大 17－12 東海大
山梨大 17－10 横浜商大
上智大 14－9 千葉商大
独協学園大 19－15 青山学院大
独協学園大 18－17 都立大
東海大 28－11 東京農工大
千葉商大 15－13 山梨大
上智大 16－15 横浜商大

【順位】①上智大8戦全勝②千葉商科大6勝1敗1分＝来シーズンから3部へ復帰③横浜商科大5勝2敗1分④山梨大5勝3敗⑤都立大4勝4敗（得126、失124）⑥独協学園大4勝4敗（得145、失153）⑦青山学院大2勝6敗⑧東海大1勝7敗⑨東京農工大8敗

【後記】3部では東大が奮起して全勝を飾った。三田を中心に1試合平均24点をたたきだした攻撃力が勝因だ。

2位以下は各校とも、もうひとつ安定感に欠けたが、全般的なレベルアップは認められた。笹生（明治学院大）をはじめ秀れた技倆を持つ選手が見られたのも喜ばしいことだ。

4部は、上位2校が自動的に3部へあがるという申しあわせが刺げきとなって接戦が演じられたが前季3部の上智大が最終日を待たずまずを首位決めた。

2位は千葉商大、横浜商大、山梨大らで激しく争われたが千葉商大が巧く混戦を切り抜けた。

そのほかでは新加盟の独協学園大、青山学院大両校の健斗が目立ち、特に独協は4連敗のあと4連勝して五分の成績を残したのはみごとだった。

期待された前季2位の東海大は最終戦に1勝したに留まる不振に終った（須賀通夫・関東学連委員長）

日体大、東女体大に辛勝

▽女子

日体大 19（10－2、9－1）3 東京教大
東女体大 27（13－2、14－2）4 東京学芸大
東京学芸大 不戦勝 日女体大
日体大 35（19－0、16－3）3 国士館
東女体大 30（19－2、11－1）3 国士館
東京教大 不戦勝 日女体大
日体大 30（19－2、11－1）3 東京学芸大
東京教大 28（13－1、15－0）1 国士館
東京学芸大 14（6－3、8－4）7 国士館
日体大 不戦勝 日女体大
東女体大 20（14－5、6－3）9 東京教大
東京教大 15（6－2、9－2）4 東京学芸大
東女体大 不戦勝 日女体大
国士館 不戦勝 日女体大
日体大 9（5－4、4－4）8 東女体大

【順位】①日体大5戦全勝②東京女体大4勝1敗③東京教大3勝2敗④東京学芸大2勝3敗⑤国士館1勝4敗⑥日女体大5敗（棄権）

得	【日体】		【東女】	得
0	小野田	GK	阿久沢	0
1	川口	FP	熊谷	4
0	沢谷	FP	浅見	0
0	中村	FP	川端	0
3	津熊	FP	高橋恭	0
0	藤田	FP	大谷	2
3	石井	FP	姫野	1
0	秋間	FP	伊部	0
2	古川	FP	関	0
0	永田	FP	中島	1
9	(0)	7MT	(2)	8

（主審 上久保）

【後記】女子リーグは過去日体大の独走に終始していたが東女体大は新人姫野を加えて一段と地力を増し熊谷を中心として打とう日体に意気盛んである。今季は少差で日体に屈しはしたがあなどれない相手となろう。

他のチームはこの両校に比べるとレベルに差があり、今後の努力が大いに望まれよう。

日女体大の不参加はかえすがえすも残念である部員全体の責任ある行動を望み来年の活躍を期待する。（田中）

富山大、7度目の優勝

北信越

11月2、3の両日、新加盟の信州大（長野）など7校が参加して行われ予選リーグ2組のあと各組同位同士で1位以下の順位を争った。

その結果、富山大が金沢大に前半で勝負を決めて6シーズン連続7度目の優勝となった。

▽予選リーグA組

富山大 24―7 金沢美工大

本州大 27―5 金沢美工大

富山大 17―14 本州大

【順位】①富山大②本州大③金沢美工芸大

▽同B組

福井大 24―14 金沢工大

金沢大 35―7 信州大

金沢大 25―11 金沢工大

福井大 36―12 信州大

金沢大 20―15 福井大

金沢工大 17―11 信州大

【順位】①金沢大②福井大③金沢工大④信州大

▽5・6位決定戦

金沢美術工芸大 20（14―10、6―8）18 金沢工大

▽3・4位決定戦

本州大 24（14―8、10―7）15 福井大

▽1・2位決定戦

富山大 25（11―9、14―5）14 金沢大

【後記】優勝した富山大は技術気力ともに充実して本州大との対戦で苦戦した以外はいずれも前半に勝負を決める〝力〟を見せた。

江尻、宇井、村沢らを主力とした攻撃力はこの地区ではやはり抜群。

2位となった金沢大は大型チームとなりシーズン毎に向上しているものの試合運びに難点があり自滅した。

本州大の活躍に比べて、基礎技術の出来あがっている福井大は練習不足と精神的甘さがみえ低迷しているのは惜しい。初参加の信州大は全員1年生。素質も充分あり将来の成長が期待されるチームである。

全般的に競技力がレベルアップしているがやはり中央球界に比しスピード差があり、この差をいかに早く縮めるかが今後の課題であろう。（若山博・北信越学連理事長）

名城大、初の2位進出

東海

男子1部6、2・3部各5校と女子3校が参加し、10月26日から11月17日まで名古屋市・天神山球技場を主会場として開かれた。

男子1部は中京大が3年以下のメンバー編成のため本調子に遠く拙戦をつづけたが、他校が星をつぶしあったため辛くも首位を保った。3シーズン連続18度目、秋季リーグの優勝はこれで9年連続である。2位に初めて名城大が進出注目された。2部は岐阜大、3部は滋賀大。

女子は、復帰の松阪女短大に記録的大勝をした中京大と中京女大の決勝になったが、攻守に安定度を増した中京大が快勝、5シーズン連続6度目の優勝をとげた。

▽男子1部

中京大 15（10―2、5―5）7 名城大

名古屋大 31（17―7、14―9）16 南山大

愛知教大 40（25―8、15―7）15 中部工大

中京大 10（7―1、3―7）8 南山大

名古屋大 36（19―4、17―4）8 中部工大

名城大 19（10―10、9―6）16 愛知教大

名城大 17（12―2、5―1）3 南山大

愛知教大 15（5―6、10―8）14 名古屋大

中京大 37（18―7、19―2）9 中部工大

中京大 19（9―8、10―6）14 愛知教大

名古屋大 13（8―9、5―4）13 名城大

引き分け

南山大 13（8―7、5―3）10 中部工大

名城大 19（9―5、10―6）11 中部工大

愛知教大 23（10―10、13―4）14 南山大

中京大 17（7―4、10―8）12 名古屋大

【順位】①中京大5戦全勝②名城大3勝1敗1分③愛知教大3勝2敗④名古屋大2勝2敗1分⑤南山大1勝4敗⑥中部工大5戦全敗

▽同2部

愛知大 18―14 名古屋学院

岐阜大 22―15 名工大一部

岐阜大 17―15 名古屋学院

名工大一部 26―13 三重大

三重大 19―15 愛知大

名工大一部 17―15 名古屋学院

岐阜大 21―14 愛知大

三重大 17―15 名古屋学院

名工大一部 11―8 愛知大

岐阜大 24―12 三重大

【順位】①岐阜大4戦全勝＝3度目の優勝②名工大一部3勝1敗③三重大2勝2敗④愛知大1勝3敗⑤名古屋学院大4敗

▽同3部

滋賀大 19―17 県立三重大

静岡大 33―10 名工大二部

滋賀大 29―16 大同工大

滋賀大 18―12 静岡大

県立三重大 29―16 大同工大

静岡大 19―17 大同工大

県立三重大 28―15 名工大二部

静岡大 13（分）13 県立三重大

滋賀大 29―10 名工大二部

大同工大 18―17 名工大二部

【順位】①滋賀大4戦全勝＝初優勝②県立三重大2勝1敗1分③静岡大2勝1敗1分④大同工大1勝3敗⑤名古屋工大二部4敗

中京大連続の男女制覇

▽女子

中京女大 48（22―0、26―0）0 松阪女短大

中京大 47（24―0、23―0）0 松阪女短大

中京大 14（6―3、8―1）4 中京女大

【順位】①中京大②中京女大③松阪女子短大。

【後記】1部は中京大の新メンバーが未調整で安定感を欠いたため近来になく混戦状態となった。

しかし鈴木、杉本、吉田らを中心とした攻撃力はスピードで各校をしのぎ苦戦しながらも全勝をとげた。

中京大にもっとも食い下ったものは南山大で、前半7―3とリード後半もその利を活かして逃げ切るかに見えたが、残り2分間に3点を奪われて逆転負けとなったのは惜しかった。

後半、再三のノーマークと7MTを落さなければ勝てた試合だ。2位争いは、はげしい星のつぶしあいから名城大が抜け出た。

中京大の対抗とみられた名大は最後まで力を出し切れずB級に落ちてしまった。

　2部は岐阜大が奮起して全勝。余勢をかって1部に返り咲いたのはみごとだ。2～4位もかっての1部校が並んだが、いずれも鋭さにたくましさに欠ける。

　3部は滋賀大の攻撃力が抜群で文句なく1位となった。

　全般的なレベルアップは認められるが学連としては3部が現2部の、2部が現1部ぐらいの試合内容が望ましく、1部はさらにその上に立つ展開が理想である。（的場吉憲・東海学連副委員長）

　女子は、インカレ2位で自信をつけた中京大が順調に力を伸ばし特に森、砂浜を中心とした攻撃陣の動きは鋭さを増した。

　決勝となった中京女大戦ではディフエンスも厚味のあるプレーをみせて相手のミスを誘っては得意の速攻に結びつけた。

　中京女大は、相変らず攻守にもうひとつスピードがなく、GK北岡の好守のみ目立った。（後藤良・東海学連委員長）

▽1・2部入れ替え戦

岐　阜　大　21―18　中部工大
（2部）　　　　　（1部）

岐阜大は3シーズンぶりに1部へ復帰。

▽2・3部入れ替え戦

滋　賀　大　18―13　名古屋学院大
（3部）　　　　　（2部）

滋賀大は3シズーンぶりに2部へ復帰。

関西大、驚異的な粘りを発揮

関　西

　1部リーグ戦は10月22日から11月12日まで京都市体育館を主会場に6校が参加して開かれた。

　予想どおり関西大、同志社大が順当に勝ち4勝無敗で最終日に優勝をかけ対戦した。前半リードされた関西大は後半はげしく追いこんで同点に追いつき引き分けに終わり、規定により再試合（優勝決定戦）となった。

　優勝決定戦にもつれこんだのは昭和34年春季リーグ以来19シーズンぶり史上3度目のこと。舞台を大阪府立体育館に移し11月15日に行われた。

　試合はリーグ戦同よう同志社大が前半をリードしたが、関大は終盤追いついたあと後半29分43秒に決勝点をあげ劇的な逆転優勝、2シーズンぶり4度目の優勝を飾った。

　なお2部（6校）は甲南大が3度目、3部（6校）は大阪外語大が3シーズン連続、初の4部（5校）は京都教大がそれぞれ優勝した。

▽男子1部

同　志　社　30（15―12 / 15―4）16　大阪経大
桃山学院　20（10―5 / 10―5）10　大阪体大
関　西　大　18（7―11 / 11―6）17　関　学
同　志　社　18（8―8 / 10―7）15　大阪体大
関　西　大　25（13―8 / 12―9）17　大阪経大
桃山学院　18（10―6 / 8―11）17　大阪経大
関　西　大　18（11―6 / 7―7）13　大阪体大
同志社大　25（13―10 / 12―7）17　関　学
大阪経大　20（9―9 / 11―10）19　関　学
関　西　大　20（12―5 / 8―7）12　桃山学院
同　志　社　23（16―6 / 7―7）13　大阪体大
関　学　20（11―7 / 9―13）20　桃山学院
引き分け
大阪経大　22（11―10 / 11―2）12　大阪体大
同　志　社　16（6―10 / 10―6）16　関　西　大
引き分け

▼優勝決定戦

関　西　大　12（7―4 / 5―7）11　同　志　社

関西学生秋季リーグ（1部）

		関	同	桃	経	学	体	勝	負	分
①	関西大	×	△	○	○	○	○	4	0	1
②	同志社	△	×	○	○	○	○	4	0	1
	決定戦関大12―11同大									
③	桃山学	●	●	×	○	△	○	2	2	1
④	大経大	●	●	●	×	○	○	2	3	0
⑤	関　学	●	●	△	●	×	○	1	3	1
⑥	大体大	●	●	●	●	●	×	0	5	0

2部順位　①甲南5勝②阪大4勝1敗③京大3勝2敗④神大2勝3敗⑤立命1勝4敗⑥府大5敗

▽1・2部入れ替え戦

大阪体大　17（10―5 / 7―4）9　甲南大
（1部）　　　　　　　　　　（2部）

大阪体大が1部に残留。

2部は甲南、3部は外語大

▽同2部

京　都　大　12―11　大阪府大
大　阪　大　14―9　立命館
甲　南　大　12―9　神戸大
京　都　大　19―17　立命館
神　戸　大　20―10　大阪府大
甲　南　大　18―12　大阪大
京　都　大　18―13　神戸大
甲　南　大　32―9　立命館
大　阪　大　13―10　大阪府大
神　戸　大　21―12　立命館
甲　南　大　28―8　大阪府大
大　阪　大　20―12　京都大
立　命　館　17―7　大阪府大
大　阪　大　14―9　神戸大
甲　南　大　15―9　京都大

▽同3部

大阪外語大　16―14　大阪工大
大阪市立大　14―13　大阪薬科大
大阪歯大　14―11　和歌山大
和歌山大　13―12　大阪工大
大阪歯大　21―10　大阪市立大
大阪外語大　27―14　大阪薬科大
大阪市立大　11―9　大阪工大
大阪外語大　20―12　和歌山大
大阪歯大　18―14　大阪薬科大
大阪外語大　16―9　大阪市立大
大阪歯大　13―11　大阪工大
和歌山大　16―10　大阪薬科大
大阪外語大　16―12　大阪歯大
和歌山大　17―14　大阪市立大
大阪薬科大　22―13　大阪工大

【順位】①大阪外語大5戦全勝②大阪歯科大4勝1敗③和歌山大3勝2敗④大阪市立大2勝3敗⑤大阪薬科大1勝4敗⑥大阪工大5敗

▽同4部

京都教育大　25―15　大阪教育大
大阪教育大　23―20　近畿大
追手門学院　23―14　京都産業大
追手門学院　39―10　近畿大
京都教育大　15―13　京都産業大
追手門学院　25―12　大阪教育大
京都教育大　32―7　近畿大
京都教育大　15―13　追手門学院
京都産業大　24―17　近畿大
大阪教育大　15―8　京都産業大

【順位】①京都教育大4戦全勝②追手門学院3勝1敗③大阪教育大2勝2敗④京都産業大1勝3敗⑤近畿大4敗

女子学生界がスタート

　結成が待望されていた関西女子学生界が、今秋から大阪体育大と大阪薬科大2校によってスタート3連戦を行った。

大阪体大　23（12―1 / 11―0）1　大阪薬大
大阪体大　16（10―1 / 6―0）1　大阪薬大
大阪体大　27（14―1 / 13―1）2　大阪薬大
大阪体育大3勝

岡山大首位を守る

中四国

11年2、3の両日松山市・愛媛大教育学部グランドに1部5、2部6校が参加して行われた。

1部は春季優勝の岡山大が順調に勝ち星を重ねたが、最後戦で山口大の奮起にあって1敗を喫し両校同率となった。しかし得失点差で岡山大がはるかに山口大を上廻り2シーズン連続5度目の優勝を決めた。

2部は香川大が新加盟となり3校2組の予選リーグのあと各組同位者で順位を争った。その結果、広島工大が初優勝した。

▽1部

岡山大 27（15—6、12—6）12 広島大福山
山口大 15（7—8、8—4）12 広島商大
岡山大 17（7—10、10—6）16 松山商大
広島商大 19（11—2、8—12）14 広島大福山
山口大 19（11—10、8—7）17 松山商大
広島大福山 13（5—4、8—8）12 山口大
岡山大 27（13—4、14—10）14 広島商大
松山商大 25（12—8、13—10）18 広島大福山
山口大 12（9—5、3—6）11 岡山大
松山商大 19（10—7、8—8）15 広島商大

【順位】①岡山大3勝1敗（得82、失54）②山口大3勝1敗（得58、失53）③松山商大2勝2敗④広島商大1勝3敗（得60、失75）⑤広島大福山1勝3敗（得57、失83）

▽2部A組

近大呉工学部 13—8 山口大工学部
広島大 20—8 山口大工学部
近大呉工学部 18—13 広島大

【順位】①近大呉工学部②広島大③山口大工学部

▽同B組

広島工大 26—21 香川大
愛媛大 39—12 香川大
広島工大 22—12 愛媛大

【順位】①広島工大②愛媛大③香川大

▽5・6位決定戦

香川大 17—11 山口大工学部

▽3・4位決定戦

愛媛大 21—12 広島大

▽1・2位決定戦

広島工大 17（7—7、10—9）16 近畿大呉工学部

【後記】1部は各校の実力が接近し各試合とも白熱した。

優勝争いは候補の山口大が第3戦で広大福山に敗れる波乱があり、堅実な試合ぶりをみせた岡山大が全勝を飾るかにみえたが、奮起した山口大の斗志に敗れ、両校同率となった。

わずかに得失点差で岡山大の優勝となったが山口大にとっては広大福山戦が悔やまれよう。

両校とも、ワンマン・チームであり調子の整えかたに苦労しているあたりにチームとしての安定不足を感じさせた。

3位の松山商大は3年以下の布陣で全員に走力があり来シーズンが期待される。

広島商大は長身選手を軸とした攻撃力にみるべきものはあったがスタミナがなく、広大福山は山口大から金星をあげたものの駒不足でその1勝だけにとどまった。

2部は香川大の新加盟で6校となり、広島工大が攻守に一日の長を見せて首位を飾った。

1・2部11校の共通の欠点は基本技術の未熟さで、特に走りこみの不足が目立った。

また、シュートとパスのチャンスの判断も鈍く自滅しているチームも多い。

しかし、シーズンごとに選手全員がゲームに忠実となり、マナーも向上していることは喜ばしくいつそう精進を願っておきたい。

（越智武・競技委員長）

九州

鹿児島大が初優勝
西南学院の王座崩れる

秋の九州学生ナンバー・ワンを決める九州大学体育大会ハンドボール競技は、11月21、22の両日長崎市の国際体育館に5県11校が参加してトーナメントで行われた。

進境いちぢるしい鹿児島大が熊本商大を降して勝運にのり、準決勝で春季2位の九州大（福岡）を、決勝でも常勝西南学院大（福岡）に逆転勝ちするみごとな試合ぶりで宿願の初優勝を飾った。

九州学生界で福岡、熊本以外のチームが優勝するのは初めて。

▽1回戦

長崎大 19—7 福岡教大
鹿児島大 13—8 九州産業大
福岡大 17—11 久留米工大

▽準々決勝

福岡工大 17（8—8、9—6）14 宮崎大
九州大 11（5—3、4—6、2—1）10 長崎大
鹿児島大 14（6—7、5—4、3—0）11 熊本商大
西南学院 20（10—0、10—5）5 福岡大

▽準決勝

鹿児島大 18（6—6、12—3）9 九州大
西南学院 25（13—3、12—11）14 福岡工大

▽決勝

鹿児島大 17（7—8、10—8）16 西南学院

立教、圧倒の3連勝飾る

第12回東日本学生選手権（全日本学生王座東日本予選会）は11月23日駒沢体育館に4学連秋の勝者によって行われ、立教（関東）が圧倒的な強さで3連勝した。

▽準決勝（＝1回戦）

立教（関東）24（10—6、14—5）11 中京（東海）
東北学院（東北・北海道）21（9—8、12—6）14 富山大（北信越）

▽決勝

立教 45（21—2、24—2）4 東北学院

関西大も記録勝ち
西南と岡山大を大破

第9回西日本学生王座決定戦（全日本学生王座西日本予選会）は11月24日、岡山大グランドに関西大（関西）、岡山大（中四国）の二校に、初めて九州代表として西南学院大が加わり、三者によるリーグ戦で行われた。

関西大（関西）29（12—1、17—4）5 西南学院（九州）
岡山大（中四国）20（10—3、10—7）10 西南学院
関西大 31（15—5、16—4）9 岡山大

【順位】①関西大②岡山大③西南学院大


営業二課／栗田満夫

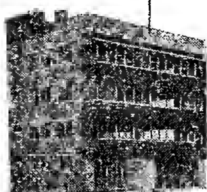
チヨダは印刷機材の合理化を推進する総合メーカーです。

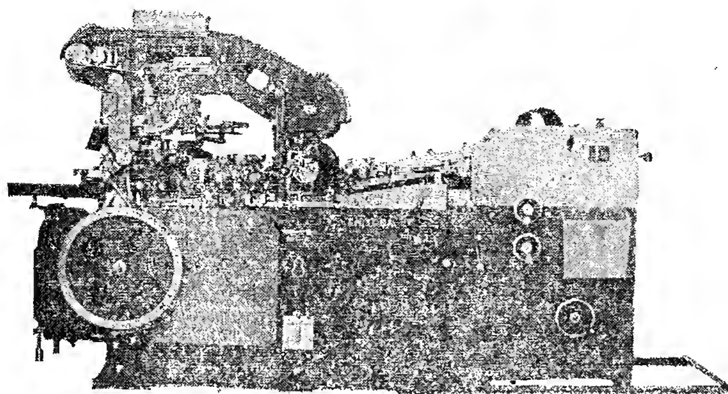
パーフェクトは夢の印刷機（全自動）です。
超薄紙から厚紙まで、忙しい人手の足りない工場に大好評。


営業一課／庄司政雄

パーフェクトはたくさんの賞賛の言葉をいただきました。
よい製品をつくる励みになります。


営業三課／打林行夫

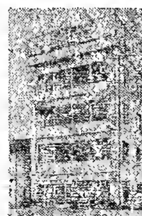

本社新社屋



新製品 **パーフェクト** 全自動B四截凸版印刷機

千代田印刷機製造株式会社
千代田印刷材料製造株式会社

本　社	東京都千代田区神田猿楽町1－4　TEL 東京(292) 2011（代）～8
横浜支社	横浜市西区高島通り1－7　TEL神奈川(045) 44－6572・7358・7028
福岡支社	福岡市御供所町3番16号（聖福寺前）　TEL 福岡（28）3960・0153
立川工場	東京都昭島市東町1丁目1番地5号 TEL 立川(0425) 2－2470・4383
九州工場	佐賀県小城郡牛津町（牛津駅前）　TEL 牛津 72


横浜支社

次から次へと変化を生みだす

訳・藤　本　強
（日本協会常務理事）

フランスの技術研究も今回で16回になった。前回と前々回と攻撃フォーメーションの実例について述べてきたが、もう一度今回攻撃フォーメーションについて実例を見ていくことにする。

これまでも、すでに何度も触れているように、ハンドボールのフォーメーションは一定のものはなく、先日来日したネデフ氏も再三強調していたように、一つのフォーメーションをその場に応じた変化がとれるようにするということがもっとも大切である。

その変化に対応できるように、フォーメーションをチーム全員が十分に本質的、根源的にのみこんでいなければならない。ハンドボールのフォーメーションを組みたてるために、もっとも重要なのはチーム全員がハンドボールのフォーメーションの性質を十分に知っていることである。これ以前にももちろん、チーム全員が基礎技術を十分にこなしていることが必要なのはいうまでもない。

技術といっても、基礎技術が完全にマスターできてからといっていたのでは、実際的でもないし基礎技術の習熟といった面からみても望ましいことではない。

むしろフォーメーションを組んで実際にこのフォーメーションを組む際に何かもっとも欠けているかを選手自身が身をもって体験しその中から自分にたりない基礎技術を習練していくことの方が実際的な方法であろう。

また、フォーメーションの練習をしながら、一寸考えさえすればいくらでも、基礎技術の練習はできる。

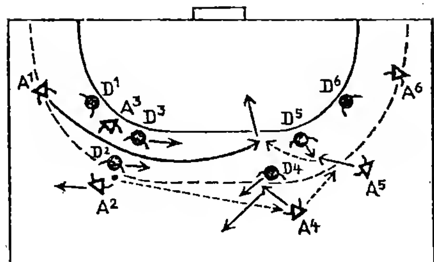
フォーメーションによる実際練習、基礎技術の練習、これを組み合せ、反復練習していくことがチームを、プレーヤーを向上させていく近道であろう。

☆　☆　☆

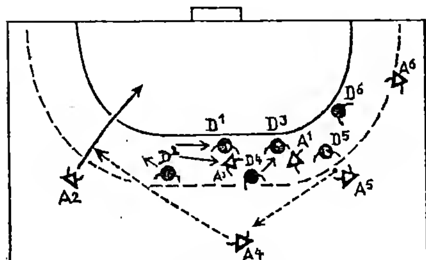
例1（1～3図参照）

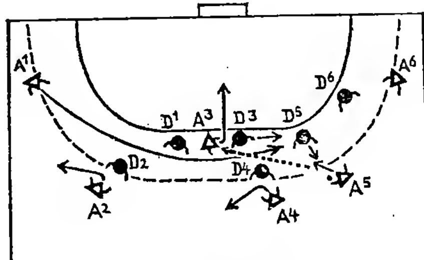
3―3の攻撃フォーメーションから前回の基本的な戦術（本誌59号23頁例5）の理論を生かしての攻撃

1（第1図）ボールはA2がもっていてA2には守備側の選手がピタリとマークに入っていて、前回の9図のようにパスができなかった場合には、A2はA4にパスを入れた後、左に走り、D2をマークさせておく、A4はパスを受



1





2

けるとやや左斜めに入っていき、D4をひきつける。そしてすぐにA5にパスを送る。ボールはA2↓A4↓A5と渡った後、左サイドから中央に走りこんだA1にパスを入れA1がシュートする。A1をマークするD1はA3がブロックする。D3はA3にひきつけられているのでA1はノーマークになる。

2（第2図参照）

1のように、パスが渡り、A5にボールが渡ったが、左から入ってきたA1にD3がマークして、ついていった時には、A5の判断が重要になる。この時、A5が1の時と同様にA1にパスを入れてしまったなら、フォーメーションとして、ここでおわり、以後の攻撃の芽はつまれ、すべての攻撃はふり出しにもどらざるをえない。

この時、A5が十分に情況をみつめ、D1をブロックしているA3にパスを入れたならば、ここにA3がノーマークになるという情況が生れる。この時にA5は必ずD5の方に進み、十分にD5を自分に引きつけておく。

1、2、の時ともに、A4はA5にパスした後、むしろスピードをもって、ややうしろに下がり、D4を前に引きだし、ポストでの細工を可能にするためと、シュート後の反撃にそなえる位置をとらなければならない。

3（第3図参照）

2図のようなA5↓A3のパスが不可能であった場合には、次の策として、ボールはA5↓A4（やや後に下がり、安全圏にいる）にかえる。

この時には、守備側はすべて右によせられているので、ねらいどころは左にある。

この時には、D6はA6に引きつけられている。D5はA5につき、A1はD3にマークされ、D1はD3につかざるを得ない。A4に当るべき、D4はポストが乱れてきているので、下がらざるを得ない。A2は1の情況の時に左サイドへ向けて動いている。D2はA2がサイドに移っているので、右サイドよりに位置を変えている。

A4はA5からパスを受けると、すぐにボールを左に振り、A2にパスを入れる。前述のような情況ができあがっているので、ノーマークになるであろう。

前回の6、7、8、9に続き、今回の1、2、3と全部で7回のシュートチャンスの可能性を示した訳であるが、ここからも、まだ多くのチャンスを産みだす可能性が残っている。A2にD2がついた場合には、A4がやや左にまわりこみ、ミドルシュートのチャンス、A1が左に入り、ポストシュートのチャンス（この際A3がD3をブロック）等々のシュートチャンスがいくらでも生れる。

以上に実例でも述べたように、ハンドボールのフォーメーションはいくらでもバリエーションが生れうる。要は味方の選手と相手の選手の動きを見たとっさの判断の中にフォーメーションはあるといっても過言ではない。

その中でも、特にその時、その時にボールをもっているものの適格な判断が必要とされる。

もちろん、他のものの判断がなければ、パスをするところもなくなってしまうし、一つも可能性のある展開とはならない。

一つのフォーメーションを練習することは、何よりもその場その場での選手の判断を必要とし、その判断の練習をすることにも大いに役だつ。

フォーメーションを練習するということはそれ一つを練習するというのでは意味はない、守備側の対応のしかたを見て、チーム全員がどのように動くべきかの問題にとり組ませ、試合の場で、それをどのように適応することができるかの練習にもなってこよう。

何よりも、フォーメーションを練習問題とするならば、実戦の場ででてくるあらゆる種類の応用問題にも対処できるようになることが大切なのである。

こういった問題すべてに対処できるようなパターンのフォーメーションは期待するべくもないが、いくつかのパターンをマスターすることと、個々の選手の好判断によって、解決していくことが攻撃を成功させる要件になろう。

要は形にはまったフォーメーションはハンドボールには、確立できない、しかしながら、ある種のパターンをうちたて、こう動けばどうなるということが予測できるようにあらゆるプレーヤーがなること、これがフォーメーションの練習の一つの重要な要素となっている。

フォーメーションの練習を通して、解決していかなければならないのは、いくつかのパターンを覚えること、フォーメーションの本質、根源をのみこませること、これらを通して、実戦における、あらゆる状況に応じて、攻撃をすることができるようになることである。

今回で攻撃のフォーメーションをおわり、次回からは、特殊な形における（たとえば、フリースロー、コーナースロー、反撃速攻など）フォーメーションの必要点について、二、三回述べて、このフランスの技術研究をとじることとしたい。

要は基礎パターンとそのバリエーションを時宜に応じて使うということにつきよう。

連載・技術教室⑥

基礎技術の重要さを強調

—NHK・TV「スポーツ教室」を見て—

松島　陽太郎
（大阪市・投稿）

ＮＨＫ教育テレビ「スポーツ教室」は11月10、17日の両日ハンドボールを採りあげ放映した。
　今回は、解説を勝繁夫日本協会選手強化指導委員、実技を全日本総合選手権優勝の全立教大学が担当。第1週を基本技、第2週を応用技に分けて多角的な指導が写し出されたが、この番組をみての感想が寄せられたので〝誌上再録〟の意味からも御紹介しよう。なお聞き手はＮＨＫアナウンサー川原恵輔氏だった。

　ＮＨＫの教育テレビがスポーツ教室を何時からはじめ、ハンドボールが採りあげられたのが何時ごろからかは知らぬが、今回のように実技を大学チームが担当したのは久しぶりのことのような気がする。
　高校チーム（去年は明星、一昨年は桜台だったと記憶するが—）がモデルだと、いかにも先生に教えられたとおり動いているという感じがテレビの画面でもよく判った。それが大学チームだと、さすがに奔放な面が見られ、それなりの特長が感じられた。——これが今回のスポーツ教室を見てまず印象に残った点である。
　制作された内容も、たぶんにそうした意識が働いていたようでかなり高度な技術やプレーが克明に紹介された。はたして、指導者のまったくいない高校チームがコーチ代りにあの画面を見ていたら果してついていけるかどうかという懸念もないわけではなかったが一方、何時までも「キャッチの際の手の開きは……」などといっているのもどうかという気持ちを抱く。あの程度のレベルまでは消化されるだけの平均的水準はあるとしてよいのだろう。そうした意味で結論からいうなら今回の内容は「非常に実益的であった」といえよう。
　以下、内容の順を追って感じたままを記そう。

実戦を考えて基本技を

①ランニング　クロス・フットワークなどを挿入したランニングの紹介が面白かった。大学以上のチームならば試合前などのランニングで、その日のコートのコンディションを知ることも出来よう。屋外ならば地面の凸凹、風向などを走りながら観察すべきなのだ。
②キャッチボール　つねに身体を動かし、それもかなり前後左右に大きく動きながら投げ、走るということを強調していた。
　11人制時代は遠投力などをつけることもキャッチボールの一つの目的にされこれほど軽快な動作は求められず、その慣習がかなり今も根強く残っている。
　うつぶせ、長座からの投捕は目新しい方法ではないがこのような紹介はやはり必要だ。
　一回転して投げ受ける動作は投捕のためにさして効果があるとは思わぬが、キャッチボール時に反射神経養成の練習を加えるのは新しい考えだ。
③パスの紹介　平凡な内容。屋内コートでの試合が多くなったことを考えれば、バランスパスや比較的長い距離でのパスについてもうすこし触れてもよかったようだ。
　変型パスとしてトリッキーなパスの紹介があったが、こういう例の扱いは難しい。解説もいささか苦しい口調だった。若い選手に多用を奨励するわけにはいかないしかといって、こうしたパスが時を得て使われるようになれば、試合構成は充実する。
　各指導者（特に高校の…）の適切な指導が望まれよう。
④パス練習　当然のことながらラン・パスが中心、特に変った練習方法もなく、わずかに「8の字型」のサークルパスのアイデアが目についた。
　三角（トライアングル）、オールコートパスなど洗練された立教大の鮮やかな練習ぶりは目を見はらされるものがあり、あまり理想的に流れると技術映画だということを忘れてひきこまれてしまう
　「よいパッサーの条件」が個条書きで示されたが、私はよいパッサーとは、配球後すぐによいレシーバーに転じることの出来る選手だと思う。パス、キャッチが一体ということは、パッサー、キャチッャー同体に同意語であろう。
⑤ドリブル練習　パス全盛の時代にあってドリブルを使うのは、低い次元のプレーのように錯覚されているが、大きな間違いだ。
　3歩3秒というハンドボールの大原則がある以上、ドリブルはいぜん大きな攻武器であるハズだ。
　しかし、昨今の選手のドリブルの稚拙さ、特にそのスピード（速力）のなさはひどい。
　この教室でも、ドリブルの必要性は説かれたが、その速度についての要求がなかったのは惜しい。
　練習方法については目新しい内容はなかったが、簡単にいつもは処理されるところをかなり多くの方法を見せたのはいい。
　「投げ終わってから走る」という習慣がパス練習、ドリブル練習の2回にわたって説かれたが高校選手は、片時もこれは忘れて欲しくない。ボールゲームのこれは鉄則だ。
⑥シュートの練習　シュートのコースが一定していたのは特別の狙いがあったのだろうか。
　同じモーション（フォーム）から自在のコース——特に上・下—

に射ち分けることが望ましいと思う。安直な紹介にすぎた。
　しかし、とびこみ、倒れこみの指導はさすがにNHKらしい気の配りようで念を入れた構成だった
　特にとびこみでまず受け身を強調したのはいい。
　初心者にはかえって高度な技術に見えるという逆説もあるが、実際問題として、いきなりとびこみ横転などできるものではない。
　欲を云えば、シュート別の得点成功率を示して、このようなデータがあるから、こうした難度の高いシュート技術が必要だといえばいっそう説得力を伴ったと思う。
⑦補助運動　巻末付録的なニュアンスで面白かった。
　特に、最近流行語になったとも思える「巧緻（こうち）性」の訓れんを目的とした運動が紹介されたのはタイムリーである。
　一人の選手がなんなくボールを片手で握り、ぐるぐる廻してみせたが、全篇を通じてボールを片手で握れるようにという指導がなかったのは、高校生の体位を考えてのことだろうか。
　『基本技』というタイトルにふさわしく、解説者、アナウンサーともに「基礎の大切さ」をくり返していたのは当然のことながら貴重な忠告である。
　現場の指導者も、つねにこの点をいっているのだが「テレビでも云っていた」となれば、その効果はまた別であろう。

個人技のつみかさねを

　実戦篇ともいうべき『応用練習指導』は前週にもましてモデルチーム立教大の特色が現れ興味深かった。
　特にお家芸のセットオフェンスの部分は、技術映画と同時に「立教大プレーの分析」でもあってファンとしての立ち場をも満足させた。
⑧チーム攻撃の基本練習　「速攻」の項目で、その条件としてサイドの効用と、厚みのある攻撃を強調したが同感だ。
　速攻というとあまりにも直線的というイメージがあるが、そのなかに多彩さは必要である。
　速攻の拙いチームの共通点は直進力のなさと厚味（フオロー）のうすさにある。
　「遅攻」でステップについて注目する点があった。つまりフットワークこそ遅攻の基本という考えである。
　また、遅攻という言葉は、プレーの緩漫、遅さにとられがちだから「セットオフェンス」と呼んだほうがよい、との意見は面白かった。遅攻――セットを組んだあといちばん要求されるのは実は〝スピード〟なのである。
　それが、遅攻というとスピーデな動きを必要としないのではという誤解が下位ランクのチームに多い。
　フイルムを見ていて驚嘆させられたのは立教大の計算された動きである。番組用に筋書きがあったのかも知れないがスピード、パステクニック、キャッチ（ハンドリング）の三要素は〝最高〟であった。なるほど遅攻ではなくてセット・オフェンスである。
　パスと選手の動き(動きの範囲)についての解説も好内容で、45度の選手の位置は深くない方がよいという点とローリング段階ですでに攻撃体制に入っているという主張は貴重。
⑨デイフェンスをつけた攻撃練習　平凡な練習風景の紹介に終ったのは意外。
　立教の独創的な練習法がもう少し見られると思ったのだが。
　攻防戦の展開もダブルポスト一辺倒だったのは解せない。
　やはり初心チームのためにもポスト（シングル）攻撃の紹介は必要ではなかったか。
⑩フリースロー及び7mスローの練習　表面的な解説に終った。しかし7mスローについては、これまで以上に時間がかけられていたのはよかったと思う。アナウンサーが「成功率が低い」といっていただけに念入りな構成は当然だ。
⑪チーム守備の基本練習　フットワーク練習はごく常識的な紹介。
　カット練習も基本的な動作が写し出されたが、カット守備の一方法として、特定の選手へのパスルートを切断する考えかた、特定の地域へのパスコースをマークする考えかたの二つが解説されたのは興味深かった。
　こうした〝考えられた守り〟が各チームでもっと開発されてよいと思う。
　守りの基本精神として『責任感』を強く望まれていたのも共感を抱いた指導者も多いだろう。
　十一人制時代のデイフェンスは攻・守分業が確立されていたため実に基本が守られていた。考えてみれば、練習時間の大半を守りにかけていたのだから当りまえかも知れぬが、それにしても最近のデイフェンスの乱れはどうしたことか。
　抜かれても、せまいコートのため、それがすぐ失点につながらぬケースも多く、守りの練習が怠られているのだろう。
　「抜かれまい」「守りぬこう」という気力はデイフェンス上達の最上無二の道である。
　チームとしての実戦的な守りについては、試合場面を使って説明されたが、巧い企画だった。
　攻撃ラインとの間（ま）、詰めなどは実戦以外で体得することは難しい。
　欲を云えば、長身選手に対してのマン・ツウ・マンとゾーンの混成シフトなどについても触れて欲しかった。
⑫GKの練習　親切な構成で、特に目新しい練習方法が紹介されたGKの練習というものは、どうしても「しぼる」要素が強くなるが、ここでも実戦的な考えが貫かれていたのは、今回の教室のまとめとしても適切であった。
　まとめとして、個々の技術がチームプレーに活かされてはじめて一連の練習が生きたものになるという意見が伝えられた。
　よいチームプレーは、正しい基本の集積であることは古くから口をすっぱくして云われていることだが、こうしてブラウン管から改めて強調されると考えを新たにすることができる。
　冒頭に述べたように、実技モデルの立教大の洗れんされたプレー同よう、解説も基礎の重大さとインサイドワークを巧くミックスさせてスマートな構成となっていたことは、今回のこの番組を成功させたといってよいだろう。

各地の記録

大阪イーグルスが5連勝

第8回西日本一般男子選手権は11月16、17の2日間福岡県小倉体育館に関西以西の9県から11チーム（実業団2、教職員3、クラブ6）が参加してトーナメントで行われた。

各地区のレベル平均化を物語るように好試合が多かったが、やはり全国大会を経験しているチームの地力が目立ち、全日本教職員2位の大阪イーグルスが三菱レ大竹（広島）、熊本クらの挑戦を退けて5年連続5度目（大阪教員時代通算）の優勝を飾った。大阪府代表の優勝は6度目。

▽1回戦（3試合）
小倉工OB（福岡）23（10－11、13－9）20 葵ク（京都）
三菱レ大竹（広島）26（16－6、10－12）18 西南ク（福岡）
大分教員（大分）31（15－5、16－10）15 丸善石油（和歌山）

▽準々決勝
大阪イーグルス 41（19－10、22－13）23 小倉工OB
三菱レ大竹 30（14－6、16－9）15 佐世保ク（長崎）
福岡教員（福岡）26（16－8、10－16）24 大分教員
熊本ク（熊本）30（15－5、15－8）13 徳山ク（山口）

▽準決勝
大阪イーグルス 24（17－11、7－12）23 三菱レイヨン
熊本ク 33（8－11、12－9、6－6、7－3）29 福岡教員団

▽決勝
大阪イーグルス 28（12－8、16－12）20 熊本ク

得	【大阪】		【熊本】	得
0	島崎	GK	島田	0
0	光島	GK		
2	松尾	FP	荒木	1
7	福井	FP	津田	0
4	樫塚	FP	元田	2
1	東	FP	井	5
2	木村	FP	上妻	7
6	青木	FP	緒方	0
6	加藤	FP	毛利	5
0	井上	FP		
0	北岡	FP		
28	（2）	7MT	（0）	20

（主審　近藤）

○……ベスト4までは波乱なく進んだが準決勝は白熱した。大阪－三菱レは、後半三菱レが相原の好プレーを中心に追いこみ24分21－22までつめたが、大阪はそのあと井上、東両ベテランの巧技で得点、辛くも逃げ切った。

熊本ク－福岡教員は後半25分15－20とリードされた熊本が、残り5分間に井の4点と上妻のゲットで同点とする驚異的な粘りで延長にもつれこみ、第2延長29－29から熊本クが4点をもぎとり熱戦にケリをつけた。

○……決勝は大阪の2回にわたる集中攻撃が効を奏した。最初は前半23分8－8からの4点連取、2度目は後半2分からの5点連取だ。これでスコアは18－9と開き熊本も懸命な反撃を示したが及ばなかった。

岡山大、教員クらをおさえる

▼岡山県一般男子秋季選手権（11月・17日）

▽準々決勝（3試合）
関西高OB 22－17 山陽ク
倉敷工OB 21－20 岡山ク
岡山教員ク 36－7 岡山工OB

▽同準決勝
岡山大 29－5 関西高OB
岡山教員ク 18－14 倉敷工OB

▽同決勝
岡山大 23（7－11、16－8）19 岡山教員ク

▼第4回長崎県高校新人大会（11月・佐世保高）

▽男子1回戦（2試合）
佐世保北 20－5 西海
口加 19－8 長崎造船

▽同準決勝
佐世保北 18－4 長崎工
口加 8－5 鹿町工

▽同3位決定戦
鹿町工 13－7 長崎工

▽同決勝
佐世保北 10（3－3、7－3）6 口加

▽女子準決勝
佐世保商 13－3 佐世保北
島原農 7－3 長崎北

▽同3位決定戦
長崎北 9－5 佐世保北

▽同決勝
佐世保商 17（7－2、10－1）3 島原農

大崎電気男女優勝

第6回東京都選手権は11月19日から30日までの6日間駒沢屋内球技場に一般男子22、同女子8チーム、今年から新たに設けられクラブ（男）部門には13チームがそれぞれ参加して開かれた。

一般男子は、国体1・2位の大崎電気、三景をはじめ関東学生界の有力校が顔を揃えたが全立教は学生王座の戦いを控えてそちらに主力をそがれ、全日体大、滴水会、芝浦工大、日体大を連破した大崎電気が2年ぶり3度目の優勝を遂げた。

決勝戦日体大は快調に攻め、速攻、ポストプレーと多彩に攻撃し、3－0とリード、優位にたったが、四年生を除いたメンバーであったため、大崎のベテランの巧技に次々と加点されリードを奪われた。後半は日体大のペースがおち、大崎のベテランのプレーにふりまわされ、大差となってしまった。

女子も社会人、学生の強豪の出場となり激戦を演じたが、決勝は大崎電気、三菱鉛筆の昨年同様の顔合せ。緒戦圧倒的な速い攻撃で三菱を5－0とリードした大崎電気が後半の三菱の食い下りをかわし優勝した。

初のクラブ部門は、高校若手のOBを主力とした「深川会」が、若木クを破って優勝。

▽一般男子準々決勝
芝浦工大 15－8 三景
大崎電気 21－9 滴水会
日体大 26－11 千代田印刷
全立大 17－16 明星ク

▽同準決勝
大崎電気 22－16 芝浦工大
日体大 26－16 全立大

▽同決勝
大崎電気 20（8－6、12－4）10 日体大

▽女子準々決勝
東女体大 18－6 東京教大
日体大 8－6 菱和ク
三菱鉛筆 15－6 美和ク
大崎電気 11－6 東京重機

▽同準決勝
三菱鉛筆 20－9 東女体大
大崎電気 15－1 日体大

▽同決勝
大崎電気 9（6－1、3－4）5 三菱鉛筆

▽クラブ（男子）準決勝
深川会 26－17 SDP
若木ク 18－17 学連委ク

▽同決勝
深川会 22（13－2、9－8）10 若木ク

▽高校男子決勝
神代 19（6－4、13－2）6 明星

▽同女子決勝
小平 9（3－2、6－3）5 佼成

▽中学男子決勝
深川四中 16－12 茶原一中
▽同女子決勝
深川五中 18－4 横山中

鯵ケ沢高が全勝優勝

◇青森県高校（男子）秋季選手権（9月・三本木高）＝リーグ戦
鯵ケ沢 14－8 青森
柏木農 16－6 三本木
鯵ケ沢 22－8 青森商
青森 24－7 柏木農
青森商 10－7 三本木
鯵ケ沢 27－4 三本木
青森 12－3 青森商
鯵ケ沢 11－9 柏木農
青森 19－6 三本木
青森商 9－7 柏木農
【順位】①鯵ケ沢4戦全勝②青森3勝1敗③青森商2勝2敗④柏木農⑤三本木

プラザー、学生勢を連破

◇第7回愛知女子社会人・学生対抗戦（10月・名古屋）
プラザー工業 12（6－5 6－4）9 中京大
プラザー工業 14（7－2 7－4）6 中京女大

男子実業団は富士製鉄

▼第13回愛知実業団リーグ（9月名古屋金山体育館）＝男子のみ
▽1部
富士製鉄B 20－19 大同製鋼
トヨタ車体 24－20 タヨシ産業
富士製鉄A 26－15 富士製鉄B
トヨタ車体 30－16 大同製鋼
日本碍子 26－18 タヨシ産業
富士製鉄A 30－20 日本碍子A
大同製鋼 20－15 タヨシ産業
日本碍子B 不戦勝 三菱重工
富士製鉄A 28－10 トヨタ車体
富士製鉄B 17－9 日本碍子A
中部電力 21－19 三菱重工
トヨタ車体 16－13 富士製鉄B
富士製鉄A 34－7 タヨシ産業
大同製鋼 24－15 日本碍子A
中部電力 17－12 日本碍子B
富士製製A 20－19 タヨシ産業
富士製鉄A 27－12 大同製鋼
トヨタ車体 23－22 日本碍子A
【順位】①富士製鉄A 5戦全勝＝6連勝7度目の優勝②トヨタ車体4勝1敗③富士製鉄B 3勝2敗④大同製鋼⑤日本碍子⑥タヨシ産業
【2部順位】①中部電力（初優勝）②日本碍子B③三菱重工
▽1・2部入れ替え戦
タヨシ産業 15－14 中部電力

桜台、名女商強し

▲愛知県高校新人大会決勝大会（11月・名古屋）
▽男子準々決勝
西尾 11－10 岡崎北
豊橋工 11－8 一宮工
桜台 15－5 岡崎工
名城大付 15－10 豊橋商
▽同準決勝
西尾 20－8 豊橋工
桜台 10－6 名城大付
▽同3位決定戦
名城大付 11－9 豊橋工
▽同決勝
桜台 12（6－3 6－4）7 西尾
▽女子準々決勝
名女商 9－4 一宮
豊橋商 11（分）11 中川商
抽せんで豊橋商の勝ち
高蔵女商 14－2 岡崎北
淑徳 11－2 半田商
▽同準決勝
名女商 11－4 豊橋商
高蔵女商 5－2 淑徳
▽同3位決定戦
豊橋商 6－5 淑徳
▽同決勝
名女商 4（1－0 3－1）1 高蔵女商

男女とも新進に栄冠

▼第6回福島県高校新人選手権（10月・小高町）
▽男子決勝トーナメント準決勝
南会津 30（14－2 16－1）3 聖光学院
安積 11（4－2 7－6）8 福島
▽3位決定戦
聖光学院 21－8 福島
▽決勝
南会津 17（8－3 9－0）3 安積
南会津高は初優勝
▽女子決勝トーナメント準決勝
本宮 8（4－4 2－2 …… 1－0 1－0）6 小高農
福島女 8（4－2 4－1）3 郡山女
▽3位決定戦
小高農 10－3 郡山女
▽決勝
本宮 9（4－3 5－2）5 福島女
本宮高は初優勝

小高農OG、宗形を破る

▼福島県一般女子決勝戦（10月・小高町）
小高農OG 17（6－7 11－8）15 東北宗形製作所

山陽女の好調つづく

▼広島県高校秋季選手権（11月・盈進高）
▽男子準々決勝
宮原 12－10 三津田
修道 21－2 呉商
三原工 12－10 呉工
広 23－10 呉港
▽同準決勝
三原工 7－5 広
宮原 14－13 修道
▽同決勝
三原工 14－13 宮原
▽女子準々決勝
豊栄 10－8 白木
戸手 7－0 賀茂
広島一女商 10－0 宮原
山陽女 19－0 呉商
▽同準決勝
山陽女 6－5 広島一女商
豊栄 8－4 戸手
▽同決勝
山陽女 9－0 豊栄

一般は三菱レ大竹

▼広島県一般男子選手権（11月・盈進高）
▽準々決勝
三菱レ大竹 19－8 呉造船
日新製鋼 25－21 広島大福山
菊松会 23－17 盈進ク
広島商大 20－19 日本鋼管
▽準決勝
三菱レ大竹 19－15 日新製鋼
菊松会 24－18 広島商大
▽決勝
三菱レ大竹 28－14 菊松会

涌谷敗れる波乱

▼宮城県高校新人大会（11月・宮城二女）
▽男子準々決勝
古川工 15－6 塩釜
古川 11－9 宮城一
仙台商 18－5 東北学院
宮城二 14－6 電子
▽同準決勝
古川工 9－6 古川
仙台商 11－7 宮城二
▽同決勝
古川工 9（6－5 2－3 …… 0－0 1－0）8 仙台商
古川工は3年ぶり2度目の優勝
▽女子準々決勝
涌谷 19－2 塩釜

古川女 10—1 祇園寺
宮城二女 18—1 宮城一女
宮城三女 9—7 古川商

▽同準決勝
涌 谷 8—3 古川女
宮城二女 12—5 宮城三女

▽同決勝
宮城二女 7（4—0 / 3—4）4 涌 谷

宮城二女は初優勝、

滝川、武庫工を振り切る

▼兵庫県高校新人大会（11月、尼崎工）

▽男子準々決勝
武庫工 18—7 竜 野
滝 川 18—3 尼 崎
明石南 14—6 兵庫工
明 石 17—7 御影工

▽同準決勝
武庫工 19—9 明石南
滝 川 20—16 明 石

▽同決勝
滝 川 16（7—6 / 9—8）14 武庫工

滝川高は2度目の優勝

▽女子準々決勝
甲子園学院 16—1 佐 用
夙 川 6—3 神 戸
県神戸高 6—5 明石商
鈴蘭台 8—8 県尼崎
抽せんで鈴蘭台高の勝ち

▽同準決勝
甲子園学院 5—3 夙 川
県神戸商 14—4 鈴蘭台

▽同決勝
甲子園学院 9（4—3 / 5—1）4 県神戸商

甲子園学院は2度目の優勝

AOK、国学院Bに敗る

▼第16回栃木県総合選手権（11月、宇都宮市）

▽男子準々決勝
海上自衛隊 10—6 国学院A
国学院B 13—8 足利商
AOK 19—16 足利工B
宇工OB 18—11 石橋高OB

▽同準決勝
国学院B 22—11 海上自衛隊
AOK 17—13 宇工OB

▽同決勝
国学院B 29（17—5 / 12—5）10 AOK

国学院高Bは3連勝

▽女子準々決勝（=1回戦）
栃木女高 16—3 足利女高
国学院A 16—9 小山城南高
国学院B 21—4 馬 頭

▽同準決勝
栃 木 女 19—7 足利商
国学院A 20—10 国学院B

▽同決勝
栃木女高 15（7—1 / 8—2）3 国学院A

水海道二高Aが優勝

▼第18回茨城県総合選手権（11月・笠間高）

▽女子準々決勝
石岡二高B 10—9 鉾田二高B
笠間高A 9—6 石岡商
水海道二高 15—3 石岡二高A
八郷高A 5—4 笠間高B

▽同準決勝
石岡二高B 15—3 笠間高A
水海道二高 7—4 石岡二高A

▽同決勝
水海道二高A 11（6—3 / 5—1）4 石岡二高A

▽男子準々決勝（11月、勝田市）
麻生高A 17—9 勝田生徒隊
石岡一高B 16—8 茨城大
茨 苑 ク 20—16 麻生高B
自衛隊勝田 24—9 真壁高

▽同準決勝
麻生高A 11—6 石岡一高B
茨 苑 ク 16—13 自衛隊勝田

▽同3位決定戦
石岡一高B 18—17 自衛隊勝田

▽同決勝
麻生高A 23（9—6 / 14—7）13 茨苑ク

実業団は勝田自衛隊 クラブは茨苑ク

昭和43年度実業団・クラブ大会（10月10日於勝田自衛隊）

▽実業団準決勝（=一回戦）
日立製作所 不戦勝 TCM
勝田自衛隊 29—17 原子力研

▽同決勝
勝田自衛隊 20—13 日立製作所

▽クラブリーグ
茨 苑 ク 35—7 流通経大
亀 丘 ク 16—11 流通経大
茨 苑 ク 23—13 亀 丘 ク

川原代町が優勝

第2回竜ケ崎市総合選手権（10月、竜ケ崎一高）

▽男子準決勝
川原代町 27—13 TCM
流通経大 16—14 サンダース

▽同決勝
川原代町 23—15 流通経大

帝タイガース・四谷商勝つ（男子）（女子）

東京城北地区選手権大会（9月早稲田学院）

▽男子準決勝
帝タイガース 26—17 井 草
早 院 ク 22—10 波 多 ク

▽同決勝
帝タイガース 14—12 早 院 ク

▽女子決勝トーナメント準決勝
四谷商 8—4 朝霞高
池袋商 11—3 赤羽商

▽同決勝
四谷商 5—4 池袋商

秋の大学定期戦

▽第2回広島商大—松山商大（11月1日・松山商大）
広島商大 16（8—7 / 8—8）15 松山商大
対戦成績は広島商大の1勝1分

▽第1回日体大—大阪体大（11月15日・大阪府立体育会館）
日体大 23（8—4 / 15—4）8 大阪体大

▽第20回立教—法政（11月15日・法政大）
立 教 26（14—13 / 12—5）18 法 政
立教の勝利は2年ぶり

▽第8回中央—東北学院（11月24日・中央）
中 大 25（21—4 / 4—4）8 東北学院

▽第8回早慶明（11月30日・早大）
早 大 14（6—7 / 8—7）14 明 大
慶 大 18（7—5 / 11—5）10 明 大
早 大 28（11—3 / 17—14）17 慶 大
早大は2年連続6度目の優勝

大阪経済大が優勝

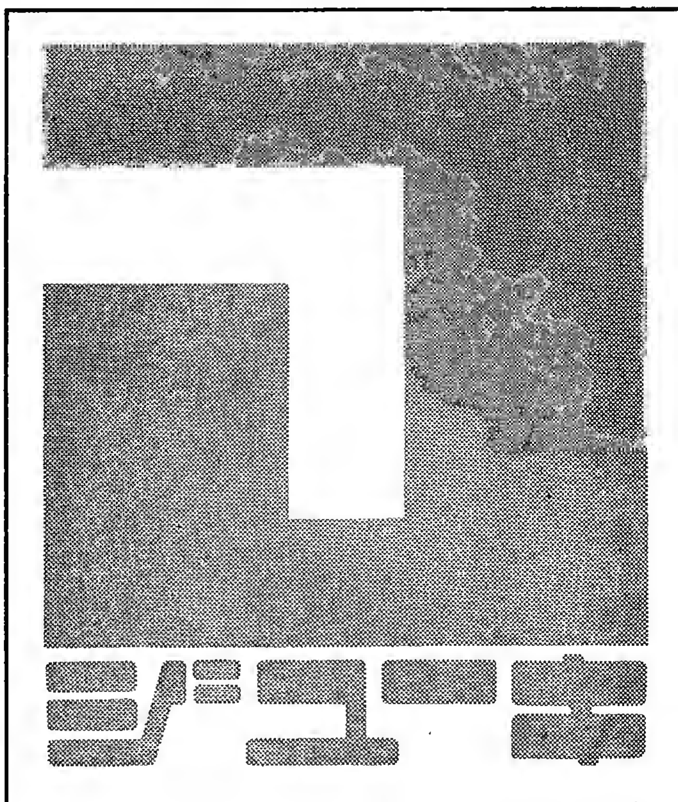
▽関西学生新人戦決勝（11月・阪大）
大阪経大 14（6—2 / 8—4）6 桃山学院

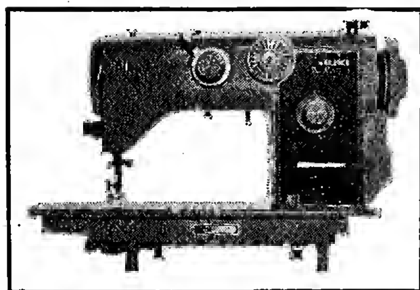
編集後記

ことしもいよいよ押しつまりました。いろんなことがありました。

世界選手権の中止が一番大きなことでしょう。今号には国体の高校選抜の問題を扱いました。ほとんどの所から原稿を頂きました。賛否両論ある中で、共通した悩みがあります。これはナショナルチーム作りのとき、協会がぶつかる問題と同じです。本誌次号は二月一日に発行します。どうぞよいお年をおむかえ下さい。（TF）

ミシンはマークで
お選び下さい





*HZD－956*型
ダイカスト・フルオートジグザグ

東京重機工業株式会社
本社工場 東京都調布市国領町8丁目2番地ノ1電話（480）1111番（大代表）

日本ハンドボール協会編
ハンドボール
第六十号
昭和四十年六月七日第三種郵便物認可
昭和四十三年十一月二十五日印刷 昭和四十三年十二月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南町二五
電話 大代表(67)二二一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価百五十円
(年間購読11回・千二百円)